



松本市歴史文化基本構想

関連文化財群 紹介ハンドブック

はじめに

1 松本市歴史文化基本構想について

松本市では、平成25年度から「松本市歴史文化基本構想」を策定するための取組みを進めてきました。歴史文化基本構想は、地域の文化財を、指定や登録の有無にかかわらず幅広く捉えて把握し、文化財を周辺環境まで含めて総合的に保存活用するとともに、文化財を核とした魅力あるまちづくりを進めていくための、文化財保存活用のマスタープランです。

松本市歴史文化基本構想の策定にあたっては、各地区公民館を拠点とし、住民の皆さんが主体となって、地域にある文化財の調査や関連文化財群の設定に取り組んでいただきました。松本市内には国宝松本城天守を始めとする多くの文化財があり、連綿と受け継がれてきた歴史と文化が市の大きな魅力となっています。しかし、近年の社会環境の変化や少子高齢化に伴う人口減少などの影響を受け、地域の魅力となっている文化財の継承が困難になりつつあり、身近にある多くの文化財がその価値を見出されないまま失われつつあるのも事実です。

こうした状況の中、住民の皆さんが中心になり「地域のたから」である身近な文化財を再認識し、後世に伝えていく取組みを通じて、地域交流の輪を形成していくことを目指して松本市歴史文化基本構想の策定に取り組んできました。この取組みは、地域に対する理解を深めるとともに、愛着と誇りを育み、住民の皆さん一人ひとりの人生を豊かにし、地域の連帯感を一層強め、地域の活性化につながるものと考えています。

松本市歴史文化基本構想は、文化財を活かし、松本らしい未来を創造していくことを目的として、策定するものです。

2 関連文化財群について

「関連文化財群」は、歴史文化基本構想に位置付けられた文化財の捉え方です。

有形・無形、指定・未指定といった区分を問わず、地域に存在する多種多様な文化財を関連の深いもの同士で結び付け、一定のまとまり(群)として捉えたものが関連文化財群です。文化財を共通するテーマ(ストーリー)により群として一体的に捉えることで、これまで単体では価値を明確にできなかった文化財も、それぞれの文化財が持つ価値を再確認することが可能になります。

松本市歴史文化基本構想策定にあたっては、平成25年度から27年度にかけ、地区ごとに文化財悉皆調査と関連文化財群の設定を実施しました。悉皆調査では、松本市全域で1万件を超える文化財が抽出され、これらの調査結果の中から関連するもの同士を結び付け、関連文化財群を設定しました。

3 ハンドブック作成の目的

このハンドブックは、平成25年度から市民の皆さんが取り組んできた成果の一部をご紹介しますとともに、各地区で設定された文化財群や文化財を訪れる際の参考として作成するものです。

平成25年度からの取組みの結果、非常に多くの関連文化財群が各地区で設定されました。本ハンドブックでは、各地区が設定した関連文化財群の中から地区ごとに1つずつを選び、関連文化財群のストーリーと、文化財群を構成する文化財の地図をあわせてご紹介します。関連文化財群を設定できなかった地区は、調査した文化財の事例をご紹介します。

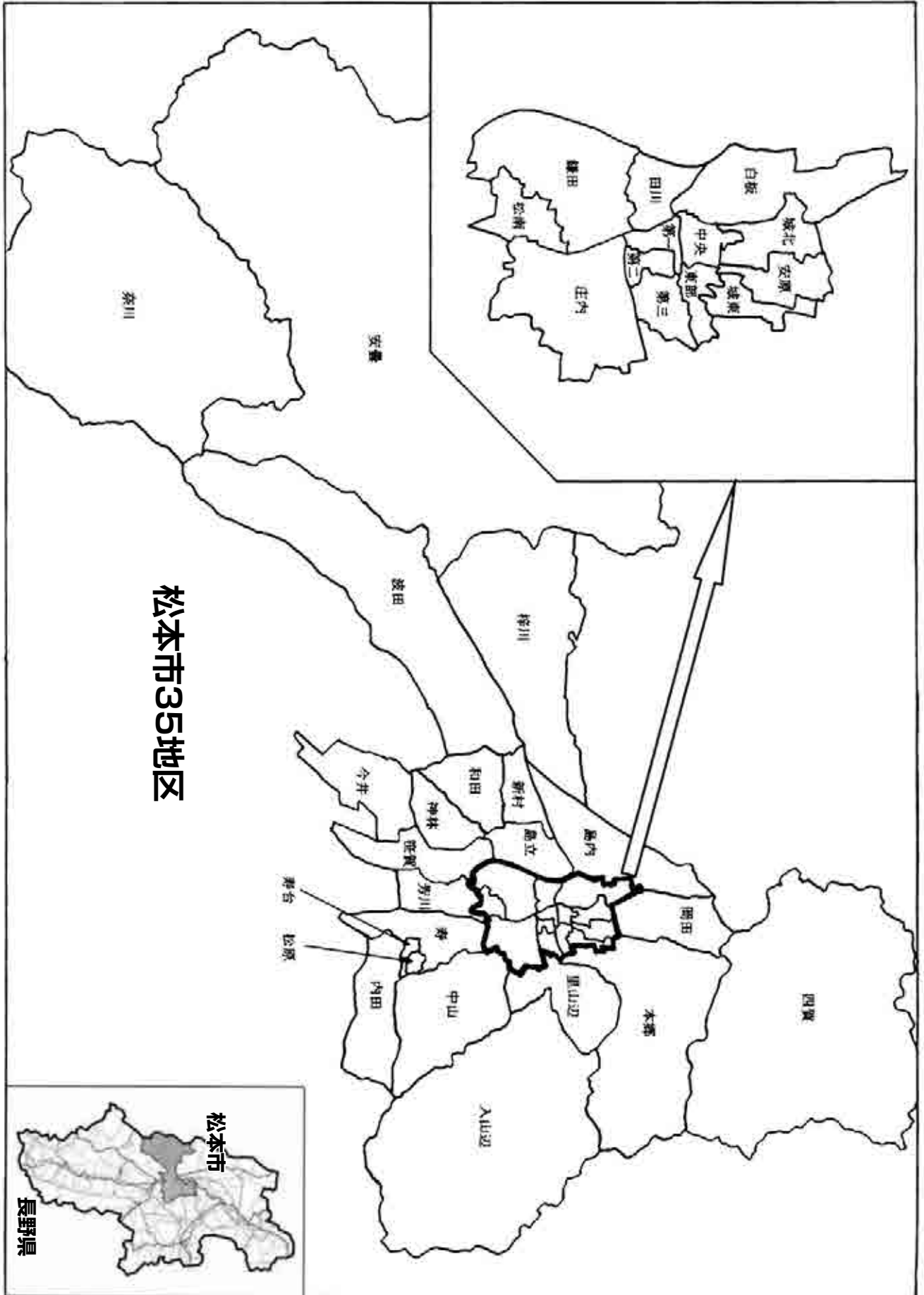
ここに掲載した様々な関連文化財群や文化財からは、それぞれの地区がどのような特徴や魅力を持っているかを読み取ることができるのではないのでしょうか。

平成30年3月20日 松本市教育委員会

- 1 本書に掲載する関連文化財群の選定と各紹介文の執筆は、各地区の文化財関係組織などが行いました。
- 2 本書に掲載している画像は、松本市教育委員会が撮影したもののほか、これまでの文化財調査や本書作成にあたり、各地区公民館や調査に参加した皆さんから提供された画像を使用しています。
- 3 本文地図中の「★」マークは、関連文化財群に含まれる文化財で、無形文化財等の地図中に示す事が困難なものです。
- 4 本書は「平成29年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産総合活用推進事業)」を活用し、作成しました。

「松本市歴史文化基本構想 関連文化財群紹介ハンドブック」目次

| | |
|---|----|
| はじめに | 1 |
| 各地区で設定した関連文化財群の紹介 | |
| 1. 【第一地区】城下町の商家と暮らし | 8 |
| 2. 【第二地区】城下町の商人の信仰 | 9 |
| 3. 【第三地区】蚕業革新の中心地 | 10 |
| 4. 【東部地区】西洋館の変遷 ～立石清重とその精神～ | 11 |
| 5. 【城北地区】古代より人々の集うまち | 12 |
| 6. 【中央地区】国宝松本城とその周辺をめぐる文化財 | 13 |
| 7. 【安原地区】明治史跡と再開発施設 | 14 |
| 8. 【城東地区】松本城の鬼門封じの神社仏閣群 | 15 |
| 9. 【白板地区】白板地区の文化財 | 16 |
| 10. 【田川地区】水の豊富な地域 ～水利と水害～ | 17 |
| 11. 【庄内地区】洪水防御の遺構と祈りの風習 | 18 |
| 12. 【鎌田地区】信濃守護小笠原氏の井川城跡 | 19 |
| 13. 【松南地区】古墳を造った集落 | 20 |
| 14. 【島内地区】犬飼島の開発と経営 | 21 |
| 15. 【中山地区】村の信仰 | 22 |
| 16. 【島立地区】島立発展の礎となった“三街道” | 23 |
| 17. 【新村地区】野麦街道と集落と集落を結ぶ里道に往時をしのぶ | 24 |
| 18. 【和田地区】和田の社寺と民間信仰 – 廃仏毀釈をくぐりぬけた西善寺阿弥陀三尊像 – | 25 |
| 19. 【神林地区】水が繋ぐ神林の歴史 | 26 |
| 20. 【笹賀地区】水を制した信仰の村 | 27 |
| 21. 【芳川地区】宿場の形成と街道の盛衰 | 28 |
| 22. 【寿地区】牛伏川の治水 | 29 |
| 23. 【寿台地区】寿台地区の文化財 | 30 |
| 24. 【松原地区】住宅地造成とコミュニティづくりの歴史 | 31 |
| 25. 【岡田地区】岡田の古代から中世につらなる歴史を訪ねて | 32 |
| 26. 【入山辺地区】山家氏、小笠原氏と山城 | 33 |
| 27. 【里山辺地区】林城下の遺構 | 34 |
| 28. 【今井地区】悠久の歴史の中で | 35 |
| 29. 【内田地区】縄文集落のムラ | 36 |
| 30. 【本郷地区】温泉文化と養蚕 | 37 |
| 31. 【四賀地区】街道と宿場 | 38 |
| 32. 【安曇地区】稲核の風穴と生業 | 39 |
| 33. 【奈川地区】街道から生まれた奈川の歴史文化 | 40 |
| 34. 【梓川地区】梓川の恵みと西牧の経営 | 41 |
| 35. 【波田地区】古代の開発 大野牧と秦(波多)氏と若澤寺の成立 | 42 |
| 関連文化財群一覧(平成30年2月現在) | 43 |

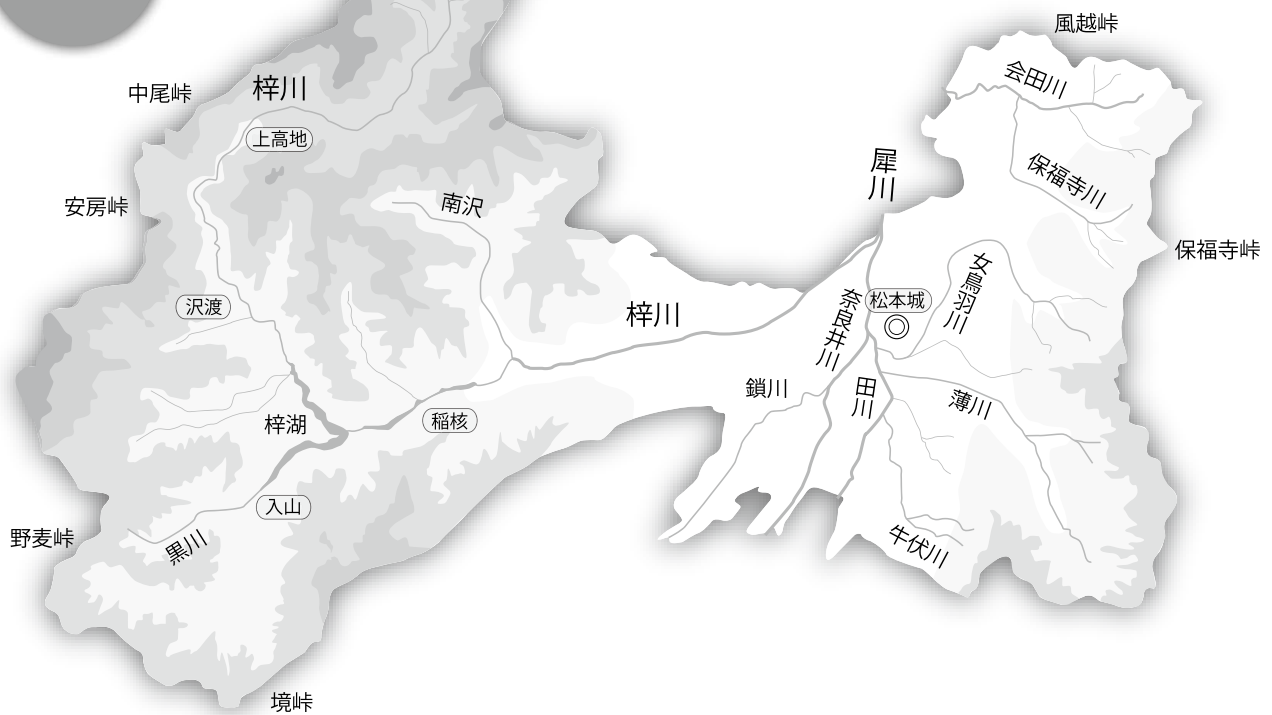


松本市35地区

街道地図



河川地図



平成25年度からの取組み(調査した文化財の例など)



笹賀地区・池生神社



寿地区・牛伏川改修工事記念碑



芳川地区・円筒分水



第一地区・生安寺小路稻荷神社



第三地区・日の出町命名の碑



島立地区・道標



波田地区・三神社



安原地区・袋町のかぎの手



今井地区・文化財見学会



松原地区・調査の様子



新村地区・調査の様子



奈川地区・調査の様子



四賀地区・調査の様子



平成28年度松本市歴史文化基本構想シンポジウム



平成29年度松本市歴史文化基本構想報告会



本郷地区・道祖神湯浴像



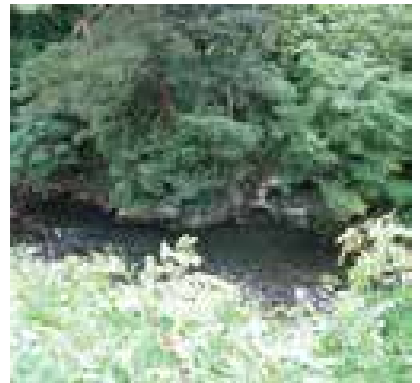
中央地区・松本城



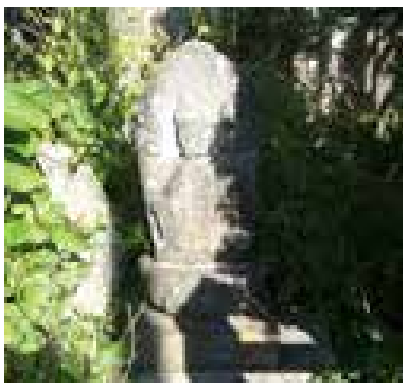
鎌田地区・城殿宮



島内地区・養老坂



安曇地区・諏訪電発電所跡と水路



白板地区・虫歯観音



中山地区・道祖神



梓川地区・御獄行者像

【関連文化財群のテーマ】

城下町の商家と暮らし

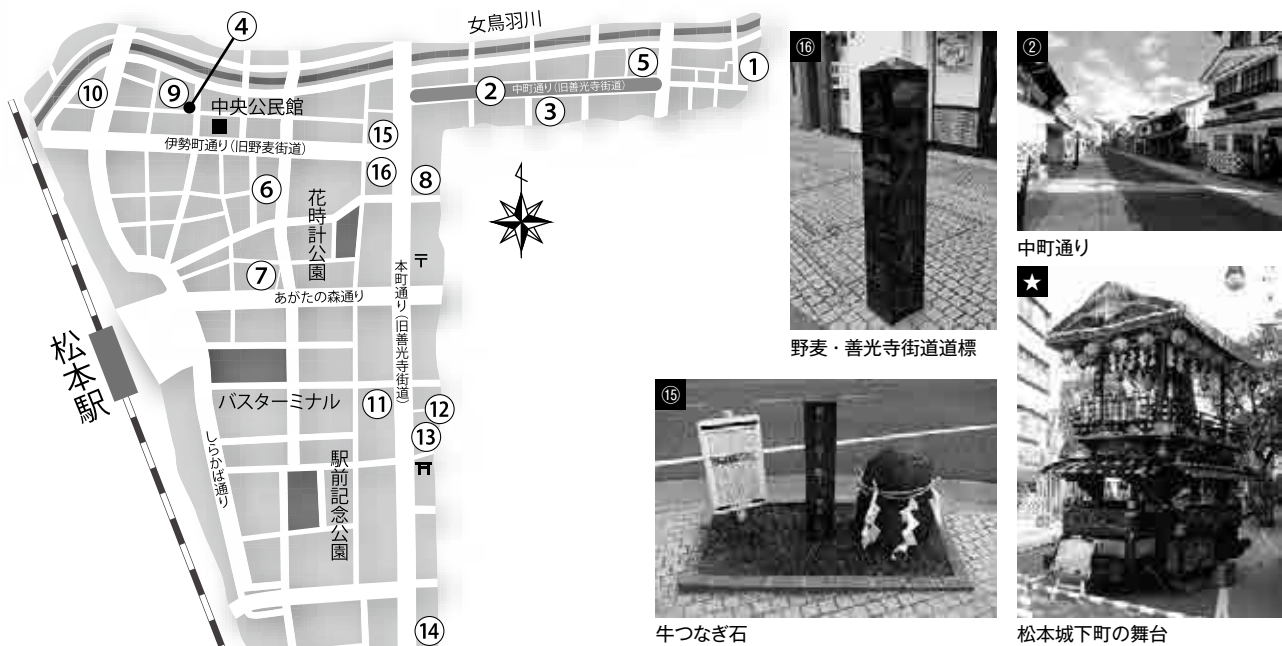
地区紹介

第一地区は、善光寺街道、野麦街道、千国街道が交わる交通の要所に位置し、松本城下の町人地として活発な商業活動が行われてきました。現在は松本駅東側の本町、伊勢町、中町を中心に、北は女鳥羽川、南は薄川にはさまれ、多くの商店と住宅が混在しています。

ストーリー

江戸時代、松本城下町の町人地は、親町3町(本町、中町、東町)と枝町10町で構成されていました。本町には大問屋倉科家、お使者宿のほか様々な品物を扱う問屋、中町には呉服屋、つくり酒屋などの大店が集まり、枝町は町人町であると同時に職人町としての性格を持つ町も多かったです。

商人の暮らしの新春行事として、戦国時代の義塩伝説に因んだあめ市(かつての塩市)が、今も毎年1月に行われています。上杉謙信から送られた塩を運んだ牛を繋いだという言い伝えのある石は「牛つなぎ石」と呼ばれ、市神様として祀られています。松本町人の精神的連帯の核として、また町人の心意気を示す象徴として、大きな役割を果たしてきたものに、町内の12台の祭礼の舞台があります。夏には、男児が青衫を盛った神輿を担ぎ先祖の霊を迎える「青山様」、女兒が唄を歌いながら町中をねり歩き祖先の霊をなぐさめる「ぼんぼん」が行われます。また、武家と町人が培ってきたものに、七夕人形を飾る習俗があります。えびす講は中世に始まった行事で、江戸時代に盛んとなり商店の売り出し催事として行われ、町の商業に大きな役割を果たしてきました。



野麦・善光寺街道道標

牛つなぎ石

松本城下町の舞台

- ①伊織霊水 ②中町通り ③くい違い ④瘡守稻荷 ⑤中町神明宮 ⑥伊勢神明宮
 ⑦神明宮 ⑧生安寺小路稻荷神社 ⑨浄林寺 ⑩福德出世地蔵尊霊地 ⑪大問屋倉科家跡
 ⑫極楽寺・古曳盤谷の墓 ⑬緑橋(袖留橋) ⑭博労町の十王堂跡 ⑮牛つなぎ石
 ⑯野麦・善光寺街道道標 ★各旧町名・小路名 ★七夕人形 ★松本城下町の舞台

ポイント

第一地区は、昔から松本の中心市街地として繁栄してきました。歴史もあり、土地区画整理によって一部の史跡はなくなったものの、土蔵造りをはじめ地区内には多くの史跡が残っています。昔から受け継がれてきた祭礼行事、伝統行事、伝統工芸などを大切に古さと新しさが交じり合う地区です。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

第一地区歴史文化調査委員会

[作成]第一地区歴史文化調査委員会

[関連文化財群のテーマ]

城下町の商人の信仰

地区紹介

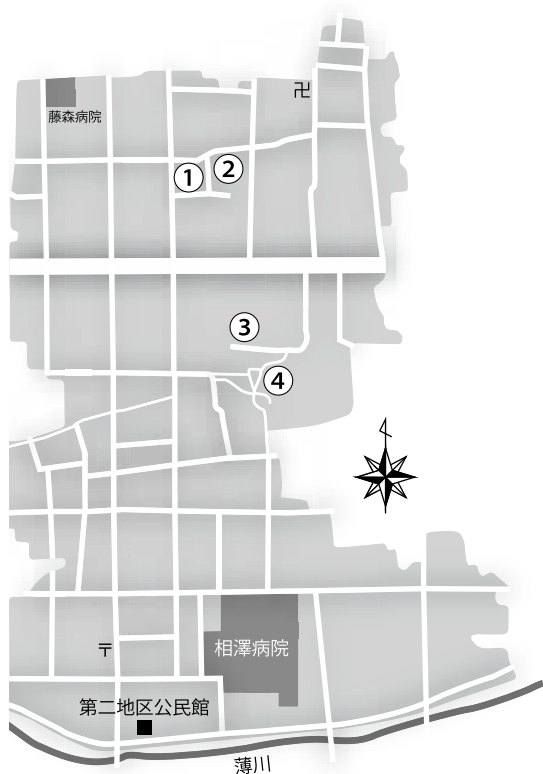
第二地区は松本城下町の南、旧善光寺街道が通った博労町から東、薄川以北が範囲の南北に長い地区で、地区内にはまつもと市民芸術館・深志神社・相澤病院などの施設は充実しています。

ストーリー

第二地区の約半分は、かつての城下町にあります。

深志神社(宮村大明神)は、女鳥羽川以南の城下町、特に商人町の総鎮守でした。神社は、城下町が成立する前の暦応年間(北朝・1338～1342)に庄内村の鎮守として勧請され、天正13年(1585)に女鳥羽川の南に商人町を割って城下町が形成されると、以後は女鳥羽川以南の商人たちの鎮守となり、松本城下町の商人の信仰の中心となりました。

また、城下町の南東の境であったため、かつては、城下町の防御機能をになっていた寺院が多く存在しましたが、徹底して行われた松本藩の廃仏毀釈により多くが廃寺になりました。現在の第二地区の範囲内にあった乾瑞寺、瑞松寺、長松寺、宝泉院、常福寺も廃寺となりました。これらの中には、いったん廃寺になったものの、明治10年代から再興されたものもあります。瑞松寺は、元々現在の全久院の場所にありましたが、明治5年(1872)に廃寺になったあと、宝泉院跡であった現在の場所に再興されました。全久院は、元々女鳥羽川沿いにあり、藩主の菩提寺でしたが、廃仏毀釈により取り壊され、同じく廃寺になった瑞松寺の場所に再興されました。



深志神社



源智の井戸



深志神社(狛犬)



深志神社(天神祭りでの舞台)

- ①源智の井戸 ②瑞松寺(石造文化財) ③全久院(石造文化財)
④深志神社(松本城下町の舞台・神輿・天神祭り・石造文化財)
★各旧町名・小路名

ポイント

第二地区には、かつてこの地区が城下町であったことを偲ばせるものが各所に遺されています。代表的なものが、城下町の町割りと町名です。地区内には多くの江戸時代の町名や小路名の碑が建立されていて、かつて第二地区が城下町の一部であったことが確認できます。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

第二地区文化財調査委員会

[作成]第二地区公民館・第二地区文化財調査委員会

【関連文化財群のテーマ】

蚕業革新の中心地

地区紹介

第三地区内には多くの小・中・高等学校があり、旧松本高等学校本館及び講堂(現あがの森文化会館)もあることから、学都まつもとを象徴している文教地区といえます。また、日の出町の井戸や源地水源地等、湧水が数多く存在します。

ストーリー

明治23年(1890)に片倉組の製糸工場が松本市清水に設立され、所長を片倉兼太郎の実弟である今井五介が務めました。創業時は小さな工場でしたが、優れた経営手腕により従業員1,500人を有する大工場へと発展させました。その要因としては品種改良により作られた「一代交雑種」の蚕を使い、質の高い高価な優良製糸を生産したことが挙げられます。

明治39年(1906)、東京大学助教授の外山亀太郎博士は遺伝の法則性(メンデルの法則)が蚕にも適用されることを証明し、異なる種類の蚕をかけ合わせることで多産で繭の質が優れた蚕を生み出す一代交雑種の普及を奨励しました。蚕糸記念公園内にある蚕業革新発祥の記念碑には、外山博士が一代交雑種を実用化した経過などが記されています。

一代交雑種の有用性に着目した今井五介は、大正3年(1914)に大日本一代交配蚕種普及団を松本に設立しました。普及団は養蚕農家に蚕を売るだけでなく、指導員が蚕育成の技術指導を行い、より質の高い繭の確保をしていきました。これらの取り組みにより一代交雑種はわずか5年程で全国へと普及し、当時では世界第一位の生糸輸出大国となりました。



② 生物科学研究所



③ 夏秋蚕研究の発祥記念碑



④ 蚕業革新発祥の碑

① 蚕玉町の旧町名碑 ② 生物科学研究所 ③ 夏秋蚕研究の発祥記念碑 ④ 蚕業革新発祥の碑 ⑤ 松商学園・今井五介の像 ⑥ 日の出町命名の碑

ポイント

片倉組の製糸工場では交配による優秀な蚕の開発等を進め、松本のみならず日本の製糸産業をけん引しました。平成29年(2017)に第三地区内に新しくできた大型商業施設には、その歴史を伝える碑文が残されています。また、生物科学研究所も後世に伝えるため、平成30年(2018)3月現在、大切に残されています。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

第三地区史跡ゾーン整備事業推進委員会 [作成] 第三地区史跡ゾーン整備事業推進委員会

【関連文化財群のテーマ】

西洋館の変遷 ～立石清重とその精神～

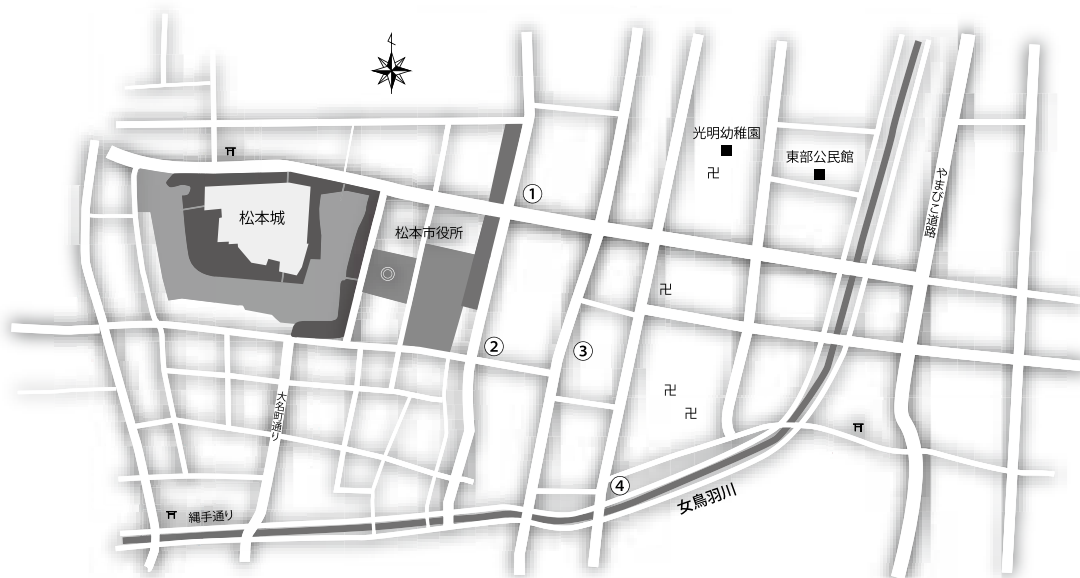
地区紹介

東部地区は全14町会からなり、ほぼ中央を女鳥羽川が流れ、東西に細長く商業地と住宅地が混在しています。地区内の東には小中学校があり、また旧城下町のエリアを中心に小規模な事業所も多く、下町的な雰囲気も残っています。

ストーリー

明治初期の建築様式である擬洋風建築。その代表格である重要文化財旧開智学校校舎を建てた大工棟梁の立石清重は、東町2丁目の出身です。地区内には立石清重が手掛けた擬洋風建築は残されていませんが、彼の弟子にあたる佐野貞二が手掛けた旧松岡医院（現かわかみ建築設計室）や宮島耳鼻咽喉科医院といった大正期の西洋風建築を見ることができます。また、宮島耳鼻咽喉科医院の隣に建つ旧青木医院は昭和初期の建築で、木造モダニズム建築からの影響が見られると言われており、スクラッチタイルの使用など当時最先端の流行が取り入れられています。なお、宮島耳鼻咽喉科医院と旧青木医院が建つ片端町の通りには、大正期に建てられた上條医院の建物も残されており、西洋館の建ち並ぶ様子は壮観です。

このように、東部地区では、明治期から大正期を経て昭和初期に至る日本の西洋風建築の変遷に思いをはせることができます。



① 洋風建築（宮島耳鼻咽喉科医院、旧青木医院）



② 洋風建築（上條医院）



④ 洋風建築（旧松岡医院）

①洋風建築（宮島耳鼻咽喉科医院、旧青木医院） ②洋風建築（上條医院） ③立石清重生家跡 ④洋風建築（旧松岡医院）

ポイント

上記の建物のほとんどは、現役で使用されています。なお、旧松岡医院は平成10年（1998）に松本市都市景観賞を受賞し、宮島耳鼻咽喉科医院・旧青木医院・上條医院・旧松岡医院は松本市近代遺産に登録されています。

【参考】 片端町に連なる上土町（中央地区）にも大正～昭和初期の建築が残されています。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

東部公民館

【作成】東部公民館

【関連文化財群のテーマ】

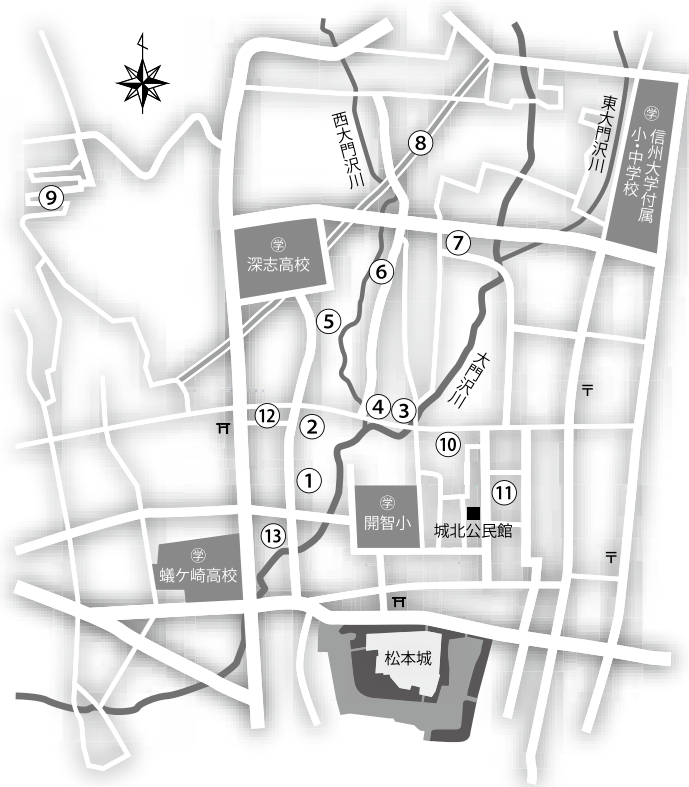
古代より人々の集うまち

地区紹介

城北地区には縄文・弥生・古墳時代の遺跡が存在し、古くから人々が生活していました。江戸時代以降は武家の住居が街道筋にあり、松本城の北に位置し、北は岡田地区、東は安原地区、西は白板地区に囲まれた、閑静な住宅地で、旧開智学校、松本市立中央図書館、松本深志高校などの施設があります。

ストーリー

この一帯は、食糧資源などの豊富な山間部を背後にして開けた空間で、女鳥羽川・薄川の湧水地帯で湿地帯です。水の便に恵まれ、古くから人が住むには適した場所であったようで、饅頭塚古墳を始めとして、縄文から平安にかけての遺跡が確認されています。饅頭塚古墳はほとんど切り崩され元の形をとどめていませんが、墳頂と思われるあたりに萬寿大明神が祀られています。また、この古墳からは、鉄製直刀・刀子・玉類などが出土しており、これらは東京国立博物館に保存されています。今の地蔵清水のあたりは中世から市が開かれ、人家も立ち並び賑わっていたところでしたが、小笠原氏が深志を回復し、小笠原貞慶が城下町の整備に着手してからは、地区の南東部(城下町の北部)は城下町の武家地として整備されていきました。高橋家住宅以外の武家屋敷は残っていませんが、城下町としての町割や、天文20年(1551)、小笠原長時が武田軍と戦う際に戦勝祈願をしたとされる大日堂、城主水野忠清に由来する首貸せ地蔵や賢忠寺跡など、松本城との関係を表す文化財が残っています。



⑤ 饅頭塚古墳



⑩ 高橋家住宅



⑫ 姫宮神社

- ① 稻荷社 ② 青面金剛像 ③ 首貸せ地蔵尊・賢忠寺跡 ④ 大日堂・道祖神 ⑤ 饅頭塚古墳 ⑥ 山の神とビヤクシンの大木
⑦ 文化村跡 ⑧ 牛道 ⑨ 大山祇神社 ⑩ 高橋家住宅 ⑪ 亀甲石垣 ⑫ 姫宮神社 ⑬ サイカチの木

ポイント

古墳：沢村・饅頭塚古墳などが地区の中心に点在しています。道：街道と街道を結ぶ補助的な「道」であるかつての牛道が、地区を横断しています。道祖神：全国的に有名な道祖神が大日堂にあります。神社：いくつかの小さな神社が点在しています。特に大日堂には貴重な文化財がいくつか保管されていて、町会が保護活動を続けています。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体 城北地区文化財保存会

[作成]城北地区文化財保存会

【関連文化財群のテーマ】

国宝松本城とその周辺をめぐる文化財

地区紹介

中央地区は、国宝松本城の城内(三の丸)を含めた、周辺16町会から構成される歴史ある地域です。松本城を中心に、町割りや歴史的建造物と人々の伝統的な活動が一体となって良好な市街地を形成し、松本の風情、情緒を留めている代表的な地域です。

ストーリー

天正13年(1585)頃、深志を松本と改め、城下の町割の整備が開始されました。その後、天守、乾小天守、黒門、太鼓門などが築造され、総堀で囲まれた郭が形成されました。総堀には東西南北5カ所の出入口(馬出)が設けられ、中でも三の丸南側、本町からまっすぐ女鳥羽川を渡った場所に城郭の正門として大手門が設置されます。三の丸内部には、家老を頂点とする上級家臣の屋敷が軒を並べていました。明治維新になって武士の時代が終わると、堀も次第に埋められて人の居住や通行が自由になっていきました。総堀に関しては、明治4年(1871)頃に大手門が破却されると、明治9年(1876)頃には門台の石垣が千歳橋の工事に使用されました。明治11年(1878)には大手門枳形東側の総堀を埋め立て、同13年(1880)に四柱神社を建設。四柱神社の鳥居下にある御幸橋にも大手門門台の石垣が使用されています。その後大正10年(1921)に西堀の総堀を埋めて市営住宅を建築。昭和7年(1932)には北馬場の総堀西側に市民プールがつくられ、堀の内部にコンクリート製の50mプールや幼児用の浅いプールができました。このように、松本城の総堀は、明治から昭和初期にかけてお城の東側にある片端の総堀だけを残して埋め立てられてきました。



松本城



松本神社



四柱神社

- ①松本城 ②松本神社 ③松本市立博物館 ④地蔵清水
⑤松本城西総堀土塁公園 ⑥枳形広場 ⑦四柱神社 ⑧御幸橋
⑨総堀跡を残す橋の一部 ★旧町名・小路名

ポイント

中央地区の文化財の殆どは松本城の旧城郭跡の広範囲に点在し、市民はもちろん数多くの観光客も訪れています。中でも松本神社は、松本城主戸田家にまつわる5人などが祀られています。また、現在、松本城南・西外堀の復元事業が進められています。近い将来、松本城周辺のかつての姿の復元が楽しみです。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

中央地区文化財調査委員会

[作成]中央地区文化財調査委員会

【関連文化財群のテーマ】

明治史跡と再開発施設

地区紹介

安原地区は、松本城下町の北東部に位置し、善光寺街道沿いに旧城下8町会と明治時代に誕生した3町会の計11町会で構成され、人口は約5,000人です。幼稚園・保育園から大学まで所在する文教地区で、昼間人口は10,000人を超えます。

ストーリー

明治維新後、明治9年(1876)に長野県が発足すると、県庁から始まり、国や県の施設の建設地について、長野市(北信)と松本市(中信)で街づくりの拠点施設としての必要性から誘致合戦が繰り広げられました。その結果として当地区内に以下の施設が造られました。

- ・ 県女子師範学校(1905～1950年) 近現代の学校教育を推進した女子教師の養成。
- ・ 歩兵第五十連隊(1907～1945年) 日露戦争後、軍事力増強のため設置。第2次世界大戦で東南アジア転戦。出兵後第150連隊編成・トラック諸島で終戦。赤レンガの建物が残っています。
- ・ 県蚕業試験場 (1907～1985年) 蚕種改良・養蚕業振興により蚕糸業を支えました。
- ・ 県陸上競技場 (1926～1988年) 県的な陸上競技場の普及・競技力向上に寄与。
- ・ 県道第2線路 (1890年～) 産業の振興・地域開発に寄与。



① 県陸上競技場跡



② 旧松本歩兵第五十連隊の碑



② 旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫



④ 県蚕業試験場跡の碑

- ① 県陸上競技場跡 ② 旧松本歩兵第五十連隊跡 ③ 県女子師範学校跡
④ 県蚕業試験場跡 ⑤ 県道第2線路(国道143号)

ポイント

第2次世界大戦後、歩兵第五十連隊駐屯地を始めとして、これら施設(道路を除く)は一定の役割を果たして順次廃止されました。その後、明治の史跡は時代の要請により再開発され、現在は、教育文化施設等が建設整備され、利活用されています。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

安原地区歴史研究会

[作成] 安原地区歴史研究会及び安原地区公民館

【関連文化財群のテーマ】

松本城の鬼門封じの神社仏閣群

地区紹介

城東地区は全12町会からなり、ほぼ中央を女鳥羽川が流れ、南北に細長く住宅街が広がっています。文教地区として小中学校・信州大学にも隣接しています。川の東はやまびこ道路沿いに商業街が発展し、川の西側は鬼門封じの寺社等文化財が点在しています。

ストーリー

江戸時代、現在の城東地区南西部は、城下の善光寺道に沿って、主に町民が住んでいました。松本城の北東の方角にあたる為、鬼門除けとして、岡宮神社、安楽寺(大安楽寺)、寶榮寺が置かれ、時の城主によって庇護されてきました。

岡宮神社は主に地域の氏神として崇められ、現在の氏子は29町会に及び、毎年5月には盛大な祭りが営まれています。市重要文化財の本殿は寛文3年(1663)に、煌びやかな神輿は元禄13年(1700)に時の城主水野氏が寄進したものです。安楽寺は明治初めの廃仏毀釈によって廃寺となりましたが、大正11年(1922)「大安楽寺」と改称して復興されました。市重要文化財の大日如来坐像が祀られ、1月の縁日の大わらじ踏みの行事には多くの方が訪れています。享保11年(1726)戸田家の庇護の下で建立された寶榮寺は明和7年(1770)の大火で焼失しましたが、江戸時代後期に再建された本堂は青銅葺き檜造りで荘厳です。岡田東虎によって描かれた八相涅槃図は、縦横1間半に及び類を見ない掛け軸で、寺宝となっています。また、周辺には念仏供養塔や全国で他に見ない「大酒供養塔」等、この一帯は住民が培ってきた信仰の姿をみることができる場所となっています。



大安楽寺



寶榮寺



岡宮神社

①寶榮寺 ②岡宮神社 ③大安楽寺

ポイント

この地は閑静な住宅街で、岡宮神社は樹齢400年以上の檜の大木が森を作り、春には鶯の鳴き声を聴き、秋には紅葉となり憩いの場所を提供しています。(参考)鬼門除けとして平城京では東大寺、平安京では大内裏から北東に比叡山延暦寺が建てられ、江戸城から鬼門の方向に寛永寺が建てられています。また、京都御所では築地塀の北東方位を凹ませてあります。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

城東公民館

[作成] 城東公民館

白板地区の文化財

地区紹介

白板地区は、南は白板橋のたもとから北はアルプス公園の真中あたりまでの奈良井川に沿った細長い地形で、14町会で構成されています。石器時代から弥生時代、古墳時代までの遺物・遺跡・墳墓が多数発掘されており、古くから人々が生活していました。

文化財の紹介

【信濃鉄道と北松本駅車両基地跡】

明治35年(1902)篠ノ井線が開通し、その4年後の明治39年(1906)には中央線も開通しました。これにより、松本地方は諏訪、甲府を経て関東方面に、また木曾、名古屋を経由して関西方面に直結することとなりました。

明治44年(1911)4月5日信濃鉄道は敷設の運びとなり、用地の買収も進められました。

事業の申請は、大正元年(1912)11月26日認可されましたが、着工直前に、社長である工事請負者の経営する事業が大打撃を受け、信濃鉄道の経営も不可能の状態になりました。地元資本と地域の人々の協力のもと、明治42年(1909)に松本商工会議所初代会頭、松本電灯社長に就任していた今井五介が大正2年(1913)に取締役、翌大正3年(1914)に社長に就任して起工の準備が進められ、建設現場に立ち陣頭指揮にあたりました。

大正4年(1915)1月5日に松本市駅(現北松本駅)豊科駅間の蒸気機関車による鉄道開通式が行われ、翌6日より営業(旅客・貨物)が開始されました。開通式はまず松本市駅構内で挙行され、関係者は、豊科駅まで八両編成の試乗車に分乗しました。

松本市駅には車両基地が置かれ、アメリカ製の蒸気機関車が2両置かれました。

大正4年(1915)4月5日、南松本駅(のちに松本駅に統合・鉄道院松本駅構内)が開業し、貨物に限って松本市駅から南松本駅との連帯運輸が可能となり、信濃鉄道の貨物はしだいに増加しました。それまでは、信濃鉄道の貨物は松本市駅で降ろされ、人力か馬力で松本駅に運ばれていました。この時、松本市駅から北松本駅に改称されました。

現在では駅が建て直され、文化財の説明看板が立っています。



① 信濃鉄道と北松本駅車両基地跡



① 信濃鉄道と北松本駅車両基地跡

文化財の調査を行った団体

白板地区探検隊・白板地区公民館

[作成] 白板地区探検隊・白板地区公民館

【関連文化財群のテーマ】

水の豊富な地域 ～水利と水害～

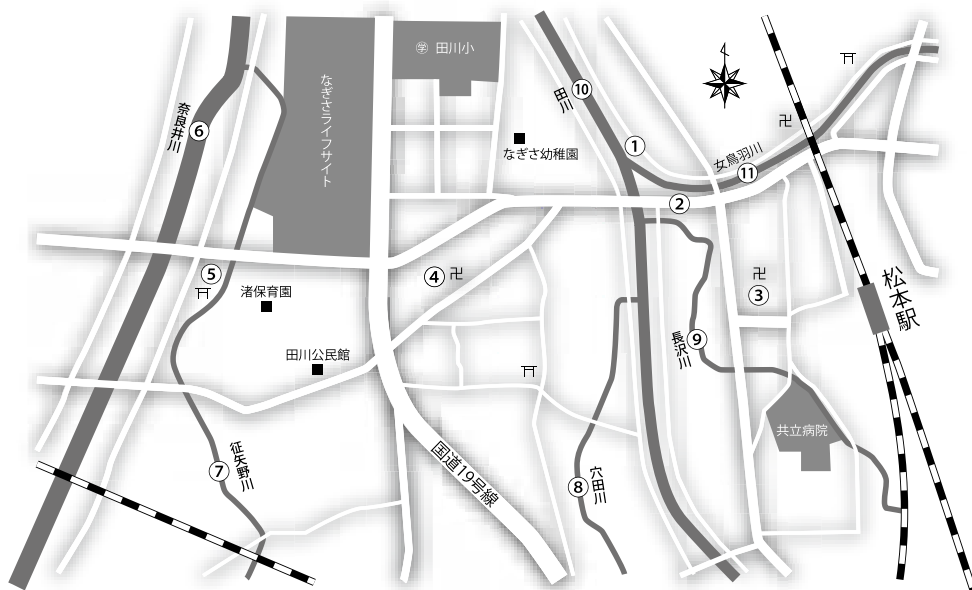
地区紹介

田川地区は、松本市の中心市街地と、松本インターのある島立地区の間に位置しています。また、JR松本駅のアルプス口があり、陸路では松本市を南北に走る国道19号、飛騨高山方面に通じる国道158号が地区の中心を通り、交通の要衝となっています。

ストーリー

田川地区は、奈良井川と田川が合流する水際地帯と、女鳥羽川と田川の合流地点上流の右岸の河岸段丘を範囲とし、旧庄内組の渚村と庄内村巾上を中心に構成されています。渚、巾上の地名が示すように、水との関わりが深い地域で、鎮守の渚大神社は「信府統記」に「水上ケ大明神」と記され、奈良井川の水神を祭ったものと思われます。近世後期から近代初期にかけて、巾上の対岸の白板に犀川通船の船着場が開設されました。近代にはこの水を活かしたレンコンの栽培や、製糸・染物・豆腐製造などが盛んとなりました。昭和12年(1937)には市営の養魚場が開設され、さらには、豊富な水を活用し、勘左衛門堰の水量増強を図るため、昭和13年(1938)に鎌田集水溝と両島集水溝の工事が行われました。

水に恵まれたこの地域は、一方で度たび水害に見舞われました。江戸時代の嘉永年間の被災者の供養塔が巾上の阿弥陀院にあります。また有史以来最大の被害といわれる明治29年(1896)の水害では、女鳥羽川が決壊し、巾上地区は壊滅的な被害を受けました。当時の様子を伝える記録や流出後に戻った仏壇が地区内の個人宅に残されています。



- ①犀川通船発着所 ②犀川通船碑 ③阿弥陀院の水難供養塔 ④渚城址 ⑤渚大神社 ⑥奈良井川
⑦征矢野川 ⑧穴田川 ⑨長沢川 ⑩田川 ⑪女鳥羽川



犀川通船碑



渚大神社



阿弥陀院の水難供養塔

ポイント

奈良井川、田川、女鳥羽川を始め多くの川が流れる田川地区は、水の恩恵を受けるとともに、水害にも悩まされてきました。地区内に残る文化財からは、この地に暮らした先人たちの水との関わりに思いを馳せ、その歴史を学ぶことができます。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

田川地区歴史文化委員会

【作成】田川地区歴史文化委員会

【関連文化財群のテーマ】

洪水防御の遺構と祈りの風習

地区紹介

東日本最古といわれる3世紀後半に築かれた弘法山古墳の麓に広がる庄内地区は、水利にも恵まれ、古い遺跡が多数確認されています。農耕を主体とした民がいくつかの集団となり、ムラが発生し、合併、成長を繰り返し現在の街の姿になってきました。

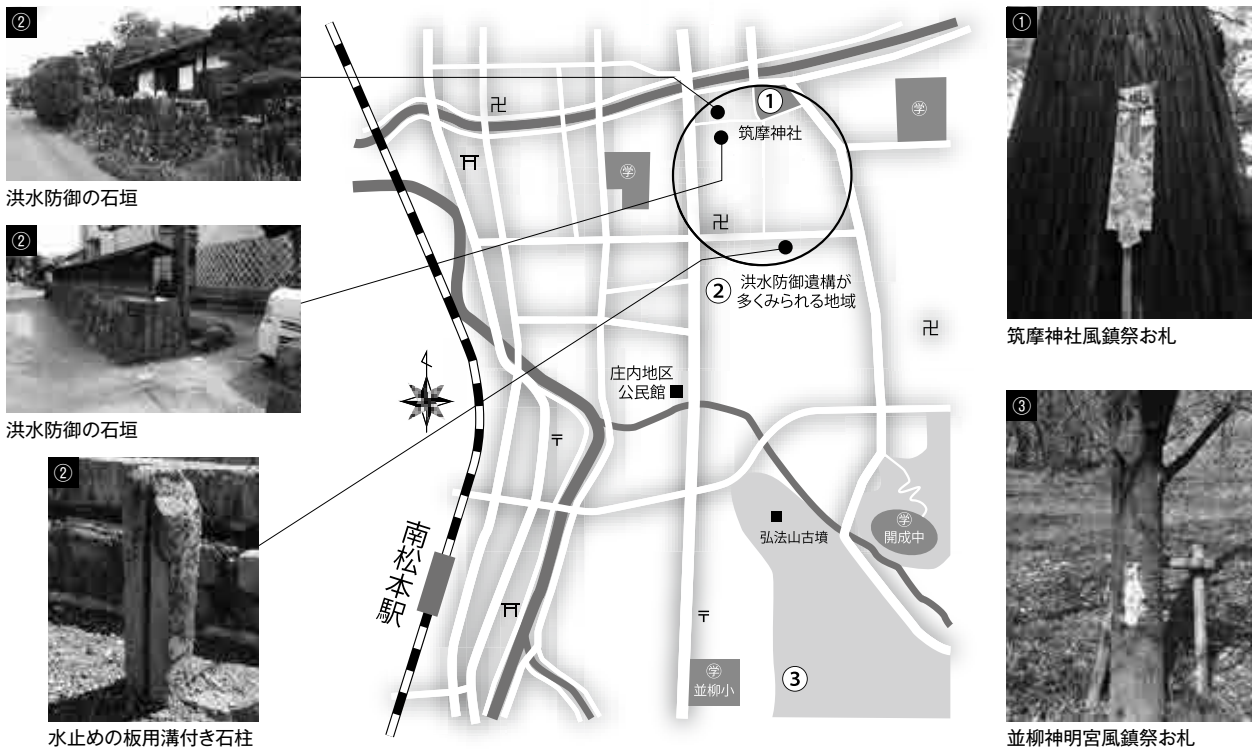
ストーリー

庄内地区は、古くは松本城下町の南の入り口にあたり、各部落(現在の町)に存在する神社(筑摩神社、若宮八幡社、多賀神社、千鹿頭神社、並柳神明宮等)、寺、庵、集団墓地とそれらを結んできた古くからの街道筋には、今でも多くの道祖神、供養塔、地藏尊等が残り、歴史の移り変わりを今に伝えています。

一方、薄川、和泉川、牛伏川が扇状地を形成する当地区は、古くから洪水の被害に遭遇しており、その被害を食い止めるための遺構と、災害から免れるための祈りの風習が遺されています。

洪水防止の遺構は、筑摩神社周辺の中林、筑摩、三才に多く見られます。屋敷の周囲を石垣で囲い、出入り口の両側に水止め用の板を差し込む溝付きの石柱を立てる構造は、近年の街の発展に伴い、徐々に変容しています。

また二百十日を前に、台風の影響を防ぎたいと願う民の祈りは、風鎮祭として筑摩神社、並柳神明宮に今でも残されています。神仏への信仰と、部落の要所要所にお札を貼り、風水の侵入を防ぎたいという願いは、氏子により受け継がれています。



①筑摩神社風鎮祭お札 ②洪水防御遺構が多くみられる地域(洪水防御の石垣・水止め板用溝付き石柱) ③並柳神明宮風鎮祭お札

ポイント

松本市の中心街と東南郊外、山裾の中間に位置する当地区も急速な発展を迎えており、日ごとに変貌を続けていますが、随所に古くからの文化財、樹木等が点在しています。道祖神、供養塔等を探しながら、古い道筋を歩き、弘法山から松本平越しにアルプスを展望するのも素晴らしい散策コースです。特に桜の開花時期がおすすめです。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

庄内地区公民館

【作成】庄内地区公民館

[関連文化財群のテーマ]

信濃守護小笠原氏の井川城跡

地区紹介

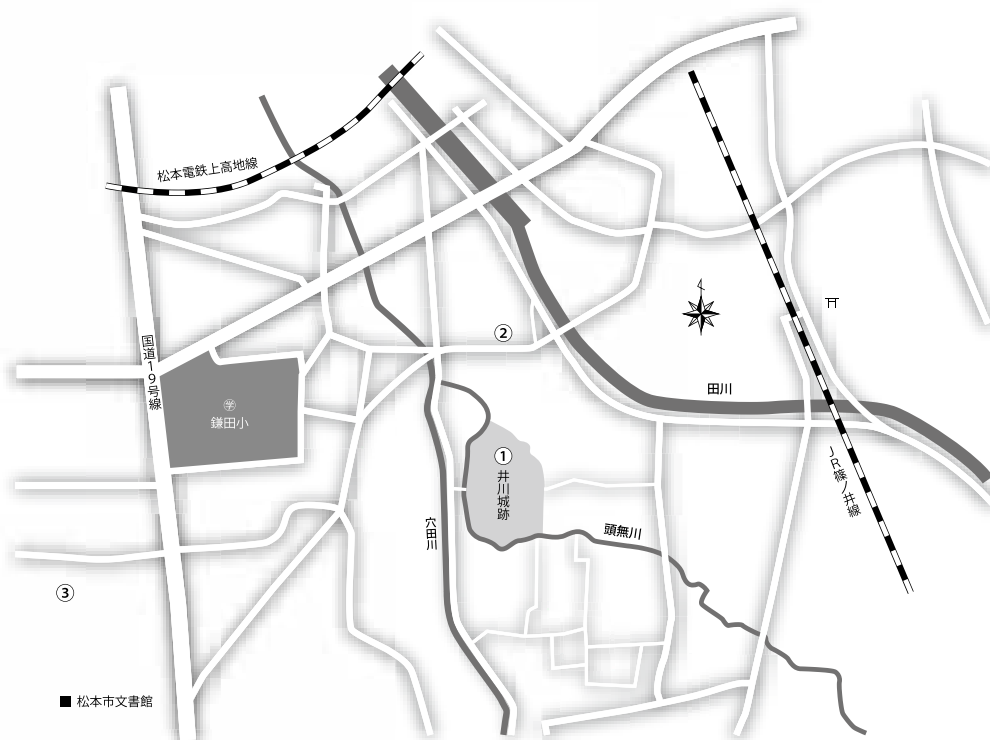
鎌田地区は旧市街地の南西部方面に広がる地域で、市内35地区の中では人口が最も多い地区です。井川城跡や足半草履など歴史ある文化財が多く残る地域と、戦後に開発された地域が混在しており、近年は個人・集合住宅や事業所が更に増えています。

ストーリー

井川城跡は、信濃国の守護であった小笠原貞宗が14世紀半ばに築城して本拠地(井川館)とした場所で、15世紀に里山辺地区林へ館を移すまでの間が井川城の時代でした。「井川城」という名称は今もこの地域一帯の地名として残っています。

小笠原貞宗は建武の政権樹立にあたり足利尊氏に従って功績を収め、その勲功の賞として建武2年(1335)に安曇郡住吉庄を与えられました。その後、信濃国守護を任じられるに及んで、信濃国司による国務に対し守護として権益を掌握するためにも府中へ拠点をおく必要が生じ、伊那郡松尾館から信濃府中の井川の地に館を構えました。

松本市の発掘調査で明らかになった館跡の姿は、守護にふさわしい規模の方形の館で、土壇は南北100m×東西70mに及びます。周辺には宗教施設も多く、城跡の北には貞宗の孫、小笠原長基の後室が庵を結んだのが起こりという阿弥陀堂(現在の廣正寺)があり、城跡の西(鎌田)には小笠原長基が勧進したと伝わる天満宮(後に深志神社に移され、現在は跡碑のみ)などがあります。



井川城跡



廣正寺



天満宮跡碑

①井川城跡 ②廣正寺 ③天満宮跡

ポイント

井川城跡は平成29年(2017)2月、林城跡とともに「小笠原氏城跡」として国の史跡に指定されました。この史跡の価値は「室町時代から戦国時代にかけての戦国領主の居城の移り変わりを示す典型例」の一つであることです。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

(文化財課へお問い合わせ下さい)

[作成] 鎌田地区公民館

【関連文化財群のテーマ】

古墳を造った集落

地区紹介

弥生から古墳・奈良・平安時代までの長い期間大きな集落がありましたが、奈良井分流が枯れると集落は無くなり野原と畑でした。戦中は軍需工場が誘致され、軍需工場の撤退後は、大きな工場、大型店、公営・民間住宅が建設され松南地区となりました。

ストーリー

この地に住んだ人々は、古墳時代前期には弘法山古墳、中期には平田里古墳、後期には中山古墳群を造営したと推定されています。この一帯の集落は、奈良井川からの分流を主な生活用水としていましたが、平安時代になると、この流れが枯れ始め、集落は急速に消えてしまいます。しかし、最盛期のこの一帯は、当時は数百軒に及ぶ住居が立ち並び、松本平では飛びぬけて大規模な集落であり、周辺に大きな影響力を持っていたことが想像されます。

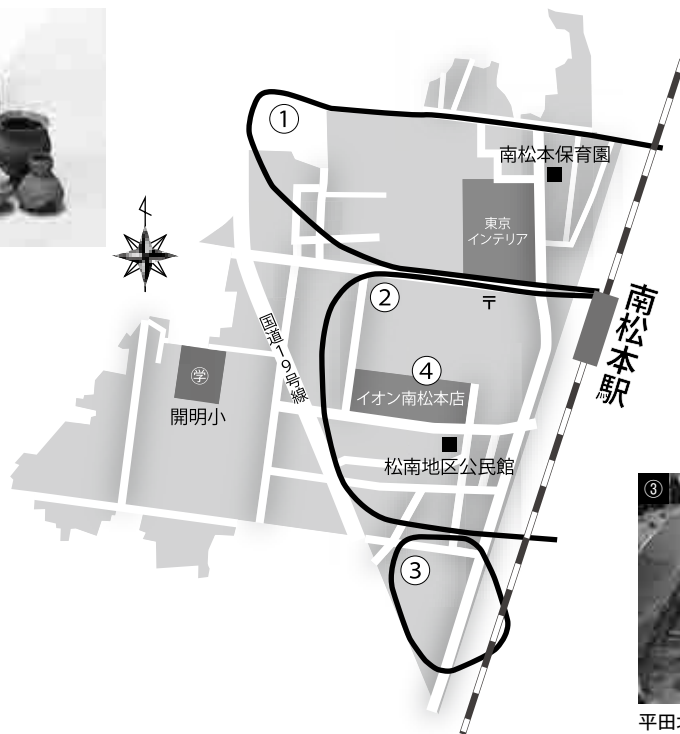
遺跡としては出川西遺跡、出川南遺跡、平田北遺跡の3つがあります。便宜的に南松本駅前通りを隔てて北側を出川西遺跡、南側を出川南遺跡、平田北遺跡と区分していますが、これらの3つの遺跡は一体と考えられ、南北1.4km、東西1.2kmに渡る松本市内でも有数の巨大遺跡を形成しています。弥生時代中期頃から出川西遺跡の東北部から居住が始まり、古墳時代後期には集落は遺跡全体に拡大したと考えられています。



出川西遺跡出土品



平田里古墳群出土品(形象埴輪)



平田里古墳群出土品(須恵器)



平田北遺跡(発掘現場)

①出川西遺跡 ②出川南遺跡 ③平田北遺跡 ④平田里古墳群

ポイント

庄内地区にある弘法山古墳は古墳時代前期に造られたと考えられる前方後墳で、東日本でも最古級の古墳の1つです。出川西遺跡からは、弘法山古墳の墳頂から出土した土器と同形式の、東海西部の影響を受けた外来系の特徴を持つ多くの土器が出土しています。このことから、この集落は弘法山古墳造営の主要な一翼を担っていたと考えられています。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

松南地区史跡ゾーン整備研究委員会

【作成】松南地区史跡ゾーン整備研究委員会

【関連文化財群のテーマ】

犬飼島の開発と経営

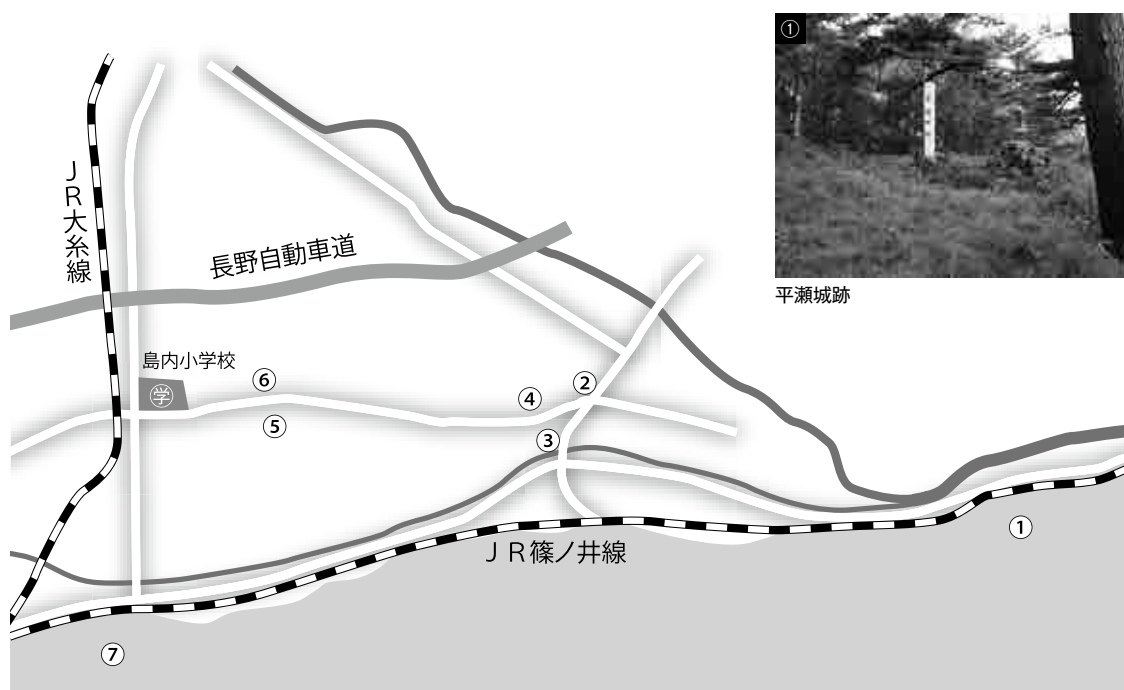
地区紹介

島内地区は、昭和29年(1954)に旧島内村が松本市に合併した地区です。奈良井川と梓川が流れる水田地帯で、島堰など多くの堰も流れる自然豊かな地域です。近年は住宅地としても発展し、最近では青島土地区画整理事業や、エプソン跡地の住宅団地化などにより、人口は増加傾向にあります。

ストーリー

島内地区の平地部は、梓川と奈良井川、そして島立境を流れる古梓川(樽木川)に囲まれ、かつては「犬飼島」と呼ばれていました。「犬飼島」の名は、犬甘氏が開いたことに由来するともいわれています。この一帯は不安定な離水地域で、集落は9世紀後半に出現したのちにいったん途絶え、次に集落が形成されるのは13世紀までくだります。

島内の中世の記録や発掘調査の所見は多くありませんが、12世紀には、平瀬の法住寺で写経をした源延という僧の記録があります。寺があったのは、布目瓦や白磁合子等が表面採取された川合鶴宮の東側と推定されています。この頃、すでに平瀬には集落が形成されていたと考えられます。15世紀後半には犬飼島・平瀬・小宮の3村が見え、それぞれの集落では、集落名を冠した氏族が繁衍していました。戦国時代になると平瀬氏と犬甘氏は、それぞれ奈良井川の対岸に平瀬城と犬甘城を築きます。平瀬城は奈良井川と梓川の合流点の東側に築かれた広大な山城です。川幅の狭い熊倉を、水陸の交通の要衝として掌握していたものと考えられますが、築城時期や居館の場所は定かではありません(居館は鶴宮八幡社の北東部にあったとする説があります)。犬甘城はいわゆる城山丘陵にあり、居館は武の宮神社の東と推定されています。



①平瀬城跡 ②平瀬氏館跡 ③平瀬遺跡 ④川合鶴の宮八幡社 ⑤犬甘氏館跡 ⑥武の宮神社 ⑦犬甘城跡

ポイント

島内地区では、犬甘氏によってはじめられたという鳥居火の行事が町、北方、東方の3町会によって現在も行われています。この行事は、「島内の鳥居火」として、松本市重要無形民俗文化財に指定されています。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

島内史談会、平瀬城跡一口城主会

【作成】島内公民館

【関連文化財群のテーマ】

村の信仰

地区紹介

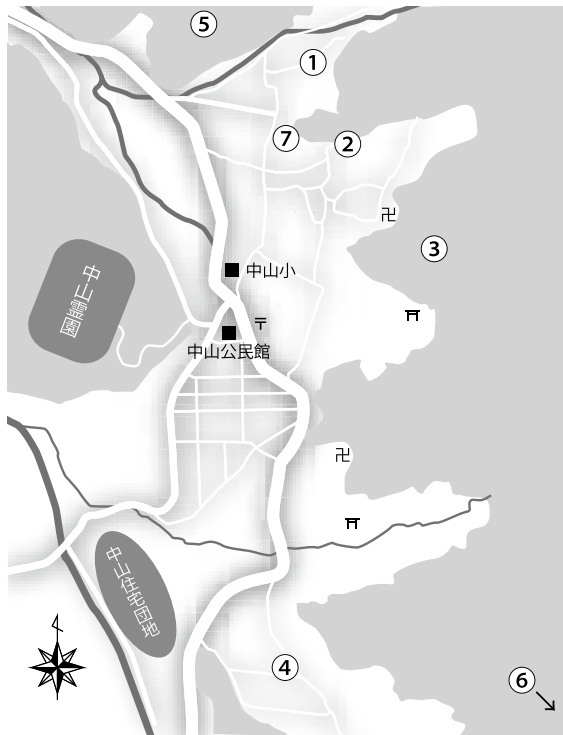
市の南東部に位置し、農村部5と新興住宅部1町会が共存した地区です。面積は21.5Km²、人口は3,500人です。石器時代から人が住み、古墳時代には盛んに古墳が築られました(中山古墳群)。更に奈良時代には皇室の料馬を貢進する御牧「埴原牧」がありました。

ストーリー

上和泉には、高遠の名工・孫右衛門の作の双体道祖神があります。御幣を背景とした像は、いかにも諏訪の御膝元といった意匠です。また、名木の道祖神は北中島から盗んできたもので、「帯代五両」「北中島」と刻まれています。景気の良い村が道祖神を新調する際に、道祖神を払い下げる“道祖神盗み”の様子がうかがわれます。その頃から道祖神の祭りとして子供達により三九郎が行われています。中山は水を東山の沢に頼っていますが、山が浅く水も十分ではありませんでした。日照りが続くと埴原の“科の木権現”に、更に雨が降らなければ鉢伏山に登ったといいます。また、北ノ入りに祀られている石尊大権現、鉢伏山から迎えたという滝の沢の滝沢大権現も雨乞いの信仰です。その他にも、庚申講や念仏講等、特定の仲間て定期的な寄合を持つ行事がありました。和泉町会では、今も組単位で念仏講が行われています。千石では「南無阿弥陀佛」を刻んだ名号塔のある場所を“善光寺”といい、尾池には善光寺大観進別当等順の掛軸が伝わっています。中和泉では秋葉様を祀り、夜燈を回し火の用心に努めています。



疱瘡神



双体道祖神(孫右衛門作)



滝沢大権現



科の木権現



御嶽神社(和泉)

①双体道祖神(孫右衛門作) ②滝沢大権現 ③科の木権現 ④念仏講仏具 ⑤御嶽神社 ⑥鉢伏山 ⑦疱瘡神

ポイント

地区に伝わる代表的な信仰は、1. 道祖神：上和泉には、高遠の名工孫右衛門作の双体道祖神があります。2. 雨乞い信仰：裏山が浅く水源の少ない中山では、日照りが続くと良く水不足になり、科の木権現、滝沢大権現、更に鉢伏山に登り雨乞いが行われました。3. 念仏講：念仏講等が定期的に行われ、千石には念仏講仏具が一式残っています。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

中山史跡愛護会

【作成】中山史跡愛護会

[関連文化財群のテーマ]

島立発展の礎となった“三街道”

地区紹介

島立地区は、梓川と奈良井川によって造成された扇状地で、3つの街道が地区内を通過しています。史跡や文化財も多く残り、御柱祭・津島様の裸祭・八日念仏・三九郎・青山様・ぼんぼんなどの民俗行事も多く行われています。

ストーリー

松本は城下町として、古くから交通の要所で多くの街道とつながっていました。その中で西に向かう野麦街道、北に向かう千国街道と仁科街道が島立を通過し、物流の要所として栄えてきました。

野麦街道は、古くから信濃と飛騨を結ぶ道で、越中富山で獲れた貴重なブリを塩漬けにして松本まで運びました。近代になり、諏訪、岡谷の製糸工場で働く女工さんが飛騨地方から苦勞して野麦峠を越えて来た話は有名です。

仁科街道は、糸糸川から千国・仁科を経て塩尻に至る街道で、中世から生活必需品の塩や海産物が運ばれた物流の要となる街道でした。

町区の真ん中、南北に走る道を千国街道と呼んでいます。歩く道から車の走る道と代わった現在、この静かな町区を通る千国街道は、しばし、往時の様子を偲ばせてくれるものがあります。街道沿いには、江戸時代の村ごとに道祖神が建てられ、主要な場所には道標も見られ往時を偲ばせます。



永田の道祖神



如意庵と桜



千国街道



沙田神社

①如意庵と桜 ②沙田神社 ③温かい母子像の奉額(御乳神社) ④永田の道祖神 ⑤千国街道 ⑥町区の道祖神 ⑦仁科街道 ⑧野麦街道

ポイント

島立地区には梓川、樽木川等を源とする水資源により緑豊かな農業地帯が形成され、さらに地区内を通過する三街道を基に町区が構成されています。地域に親しまれるお堂や道祖神などの文化財を見ながら街道沿いを歩けば、自然の豊かさに包まれた歴史・文化に触れることができます。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体 **島立公民館**

[作成] 島立公民館

【関連文化財群のテーマ】

野麦街道と集落と集落を結ぶ里道に往時をしのぶ

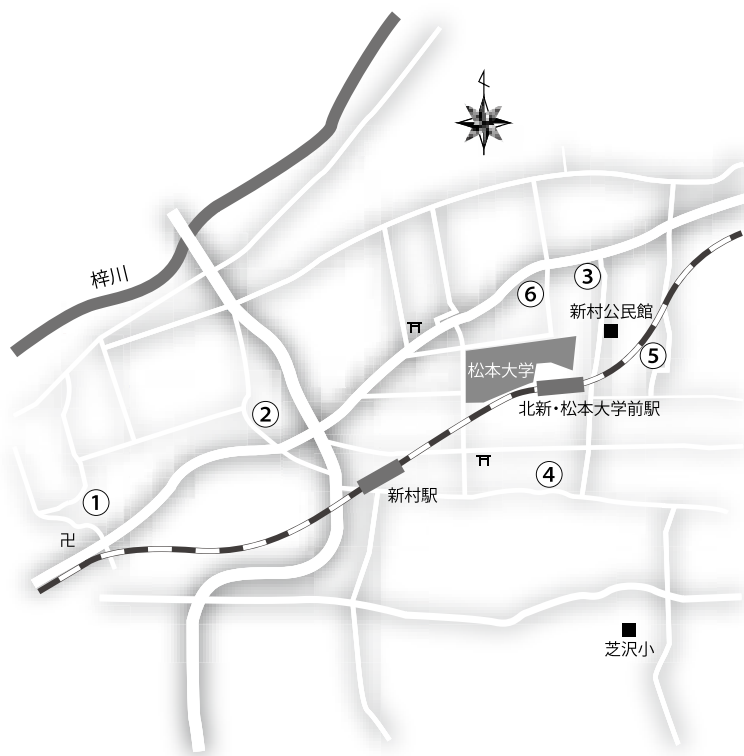
地区紹介

新村地区は、梓川右岸の緩やかに傾斜している扇状地に、水利に恵まれた水田が広がる地区です。古くに大規模な開田が行われました。国道158号線と松本電鉄上高地線が通っています。近年松本大学を誘致しました。地区内には14町会があります。

ストーリー

新村地区内を通る国道158号線は、野麦街道(野麦道)の「かぎの手」や集落を避けて新たに敷設されたので、街道の大部分は旧態を残しています。この街道は飛騨ブリが運ばれたり、飛騨の工女達を通りました。また加賀藩では参勤交代にと目論んだ道でした。この街道には大小様々なかぎの手があり、沙田神社の御柱曳行の際、北新高札場前では苦労したそうです。北新東村のかぎの手には新村役場跡があり、新村元標や道祖神がたっています。

この元標の所で野麦街道と里道(村道)中村道が分かれます。中村道は北新村郷蔵跡、北新中村集落、物草太郎遺跡地を経て南新本郷で高綱道に合流します。合流点には道祖神や火の見櫓、南新郷蔵跡地があります。上手町道は中村道から分かれ、古い町割りを残す下新上手町集落を通して、下新本田で仁科道と合流します。新村地区で「町」がつく集落はここだけです。上手町の南口と北口にかぎの手があります。屋敷内には屋敷神を祀り、墓地もあります。生活用水は屋敷の裏手を流れる水路から得ていました。集落の中程に道祖神、その奥に阿弥陀堂があります。東新などにも古い町割りが残っています。



新村堰分水工



下新南道祖神



北新西道祖神(高札場跡)

①根石道祖神 ②新村堰分水工 ③北新東道祖神 ④南新東道祖神 ⑤下新南道祖神 ⑥北新西道祖神(高札場跡)

ポイント

新村地区内には集落と集落を結ぶ里道が縦横に通っています。その路傍には道祖神や馬頭観音などの石造物や小さな社を見かけます。鬱蒼と茂っていた古木は切れ、古い民家はだいぶ建て替えられましたが、まだ蚕室・土蔵・本棟造りの家などが残されています。家々への生活用水の引水、網の目のような灌漑用水、上新の新村堰分水工にも注目したい所です。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

新村地区文化財保存会

[作成]新村地区文化財保存会

【関連文化財群のテーマ】

和田の社寺と民間信仰

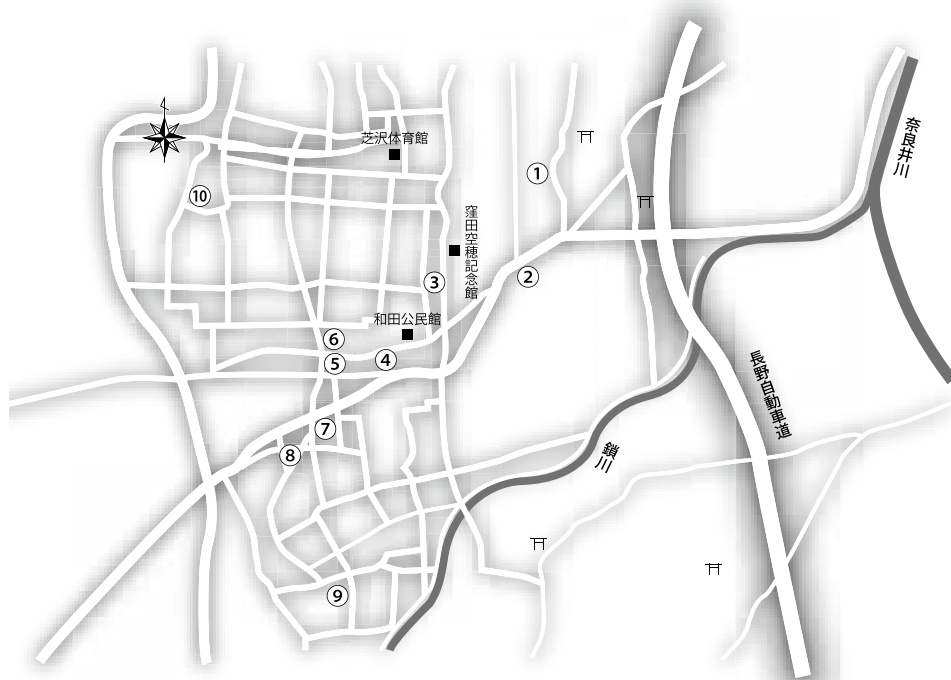
— 廃仏毀釈をくぐりぬけた西善寺阿弥陀三尊像 —

地区紹介

和田地区は松本市のほぼ中央に位置し、標高は600～650mで、梓川右岸と鎖川左岸に広がる扇状地の田園地帯に集落を形成しています。地区の西には梓川から取水した和田堰が流れ、中央に県道新田松本線、西に主要地方道松本環状高家線が走っています。

ストーリー

和田の境町会にある西善寺は、いつ頃、誰によって開かれたのかははっきりしていませんが、天和3年(1683)、僧の本明が中興したと言われている天台宗のお寺です。ここには平成30年(2018)2月に県宝に指定された阿弥陀三尊像が安置されています。本三尊像は、もとは筑摩神社に付属しておかれた安養寺に安置された仏像でしたが、同寺が戦火により廃絶した後、江戸時代になって松本清水の念来寺に移されました。さらに、明治の廃仏毀釈で念来寺が廃寺となった際、天領であったために大きな廃仏毀釈の被害を受けなかった和田の西善寺に移され、今に伝えられています。この三尊像は、長野市善光寺の本尊である金銅製阿弥陀如来・両脇侍立像の形式になって作られた、いわゆる善光寺式阿弥陀三尊像(善光寺如来)の1つです。中尊(像高49.2cm)両脇侍(像高35.4cm)とも、その作風から鎌倉末期の作とみられ、秘仏として大切にされています。毎年1月上旬の休日に御開帳され、多くの方が訪れます。他にも、9月に行われる例大祭に7台の舞台がそろう大勢の人で賑わう和田神社、境内に「学童疎開」の碑がある無極寺などがあり、住民の心の拠り所となっています。



③ 無極寺



⑥ 和田神社



⑧ 南和田神社

①西善寺 ②二尊院 ③無極寺 ④観音寺 ⑤萬年寺 ⑥和田神社 ⑦真光寺 ⑧南和田神社 ⑨聖徳院 ⑩忠全寺

ポイント

西善寺には、釈迦三尊像の他にも7点の市の指定文化財があります。中でも江戸時代の中期、笹田養跡(常住)、養徳父子が、釈迦入滅の際の情景を描いたとされる「紙本著色釈迦涅槃図」(縦4.4m、横5.1m)は、毎年春分の日を中心にした数日間、地区の人たちが、この涅槃図を掲げ、「やしょうま」を供えて祈ると共に一般公開を行います。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

和田地区文化財調査委員会

[作成]和田地区文化財調査委員会

【関連文化財群のテーマ】

水が繋ぐ神林の歴史

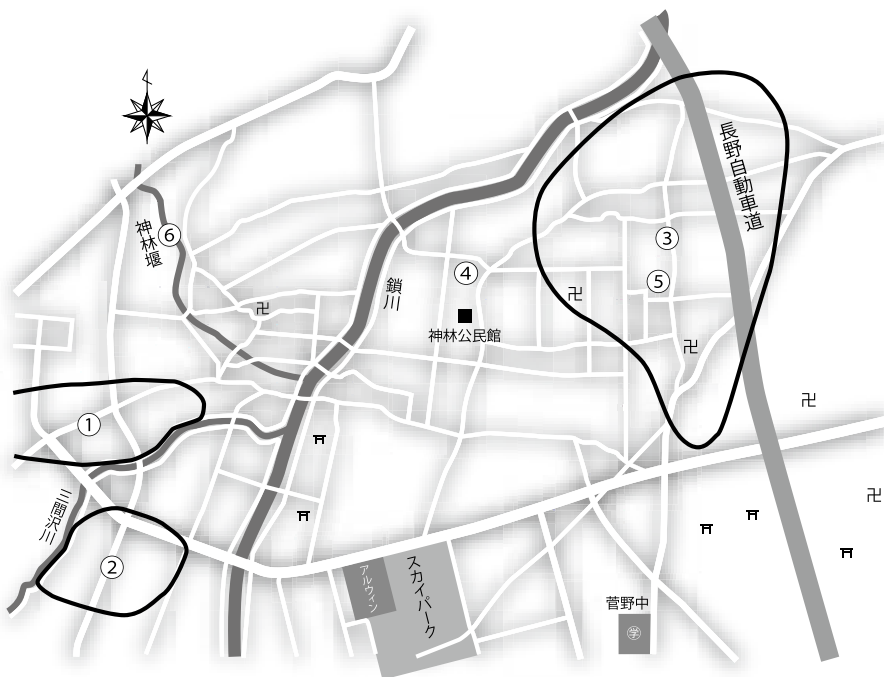
地区紹介

神林地区は信州まつもとと空港に隣接し松本市の西南部に位置する農村地帯です。

鎌倉時代の高僧「心地覚心」法燈円明国師の生誕地は現在の福應寺の地です。国師は、日本人の精神文化に影響を与えた「無門関」と言う語録や味噌、醤油、尺八を伝えたことでも有名です。

ストーリー

神林地区内では、縄文時代中期からの住居跡がいくつか発見されています。三間沢川左岸に9世紀前半に突如として出現し10世紀後半代まで継続した大集落の遺跡には、計画的な水路があり、荘園を構成する集落と考えられています。平安時代前期の下神遺跡からは多くの出土品が発見されています。しかし、出土品は短期間に集中している事から、鎖川の氾濫が繰り返されたことが原因で、集落は長続きしなかったと思われます。現在までの神林地区の開発は神林堰を除いては考えられませんが、いつ造られたのかは定かではありません。神林神社縁起によれば「梓大明神者往古安曇郡梓川上神祠瀬織津姫命、和田当所江水引揚之時節勧請」とあります。堰の完成に伴い、梓川の神を神林の水神として安置したと思われる、1171年～1175年頃の勧請であると考えられています。今では豊かな水が流れる神林堰ですが、洪水による土砂の取り除きや漏水の補強、水の取り合いによる争いなど、多くの苦難を乗り越えて今があります。現在でも、ナガレ、アレチ、ケミ、など当時の様子を伺える地名が残っています。



神林神社



神林堰

三間沢川左岸遺跡出土銅印
(長良私印)

- ①三間沢川左岸遺跡 ②川西開田遺跡 ③下神遺跡 ④神林神社 ⑤金毘羅神社
⑥神林堰

ポイント

神林は農村地帯で三間沢川と鎖川が地区内で合流していますが、農地より低い所を流れているため、農業用水は梓川から神林堰で運ばれています。水に苦労した土地でしたが、現在では豊かな農地が広がり、地域に親しまれるお堂や道祖神などの石造物が数多くあるので、自然の豊かさと文化に触れる事ができます。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体 神林地区文化財調査委員会

[作成] 神林地区文化財調査委員会

[関連文化財群のテーマ]

水を制した信仰の村

地区紹介

笹賀地区は、奈良井川に沿って古来より川の恵みを受けて拓かれた南北に細長い地域で、その歴史は縄文時代まで遡り、古代・中世・近世と歩みを辿ることのできる歴史があり、現在の笹賀地区は明治時代に近郷5村が合併して発足した笹下村に始まります。

ストーリー

笹賀地区は明治7年に小俣、二子、今、神戸、神戸新田の5村が合併し、笹下村として発足したことに始まりますが、長い間、奈良井川や鎖川の氾濫による水害と渇水に苦労してきました。地区内に残る記録にも水不足や水害に苦しめられ、筆舌に尽くしがたい苦労の後に現在の村の基礎を築き上げた先人の苦労が窺えます。時代や生活環境が変わろうとも、これらの伝承は地区内に残る文化財とともに引き継がれてきました。

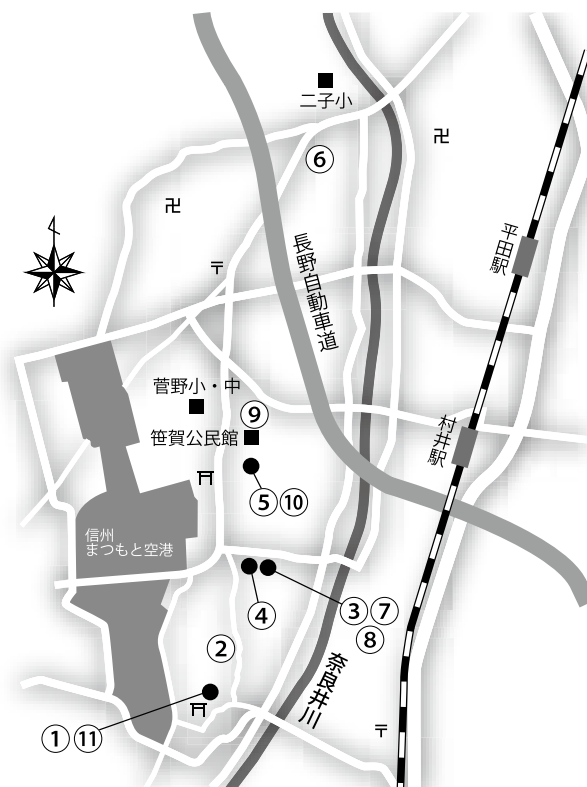
また、全国的にも養蚕が盛んだった長野県の中信地方の中でもとりわけ笹賀地区は養蚕が盛んでした。奈良井川に沿って拓けた笹賀地区は、段丘上に桑園が広がり、川と段丘上の松林に挟まれた独特の地形がカイコに流行した病原菌を防ぎ、収量が安定していたと言われる反面、桑の樹が遅霜の被害を受けやすいという欠点もありました。そんな中で、最盛期の大正初めころには、村の全戸数の4分の3にあたる415戸が養蚕に携わり、養蚕は暮らしや経済など全ての中心でした。そのため、今でも養蚕に関わる信仰や、文化は私たちの暮らしの中に生きています。



⑨ 神戸神社の瘡瘡神社



⑩ 神戸新田観音堂の徳本念仏供養塔



⑥ 下二子の子安地蔵



⑦ 小俣観音堂の線刻青面金剛

- ① 今村観音堂の木造阿彌陀如来坐像 ② 上小俣蚕玉社の木造阿彌陀如来像 ③ 小俣観音堂の木造千手観音立像 ④ 小俣神社
 ⑤ 神戸新田観音堂の聖観世音菩薩像 ⑥ 下二子の子安地蔵 ⑦ 小俣観音堂の線刻六臂青面金剛
 ⑧ 小俣観音堂の線刻観音(西国三十三番供養) ⑨ 神戸神社の瘡瘡神社 ⑩ 神戸新田観音堂の徳本念仏供養塔 ⑪ 今村観音堂の如意輪観音

ポイント

笹賀には市の重要文化財指定を受けている仏像や建造物の他にも、市内でも二番目に古く、かつ唯一の線彫りの青面金剛が刻まれた庚申塔、市内で最も古いとされる西国巡礼供養塔、3基の徳本上人の念仏供養塔等が残されているなど、大変信仰の篤い村でした。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

笹賀地区の歴史と文化を語る会

[作成] 笹賀地区文化財調査実行委員会

【関連文化財群のテーマ】

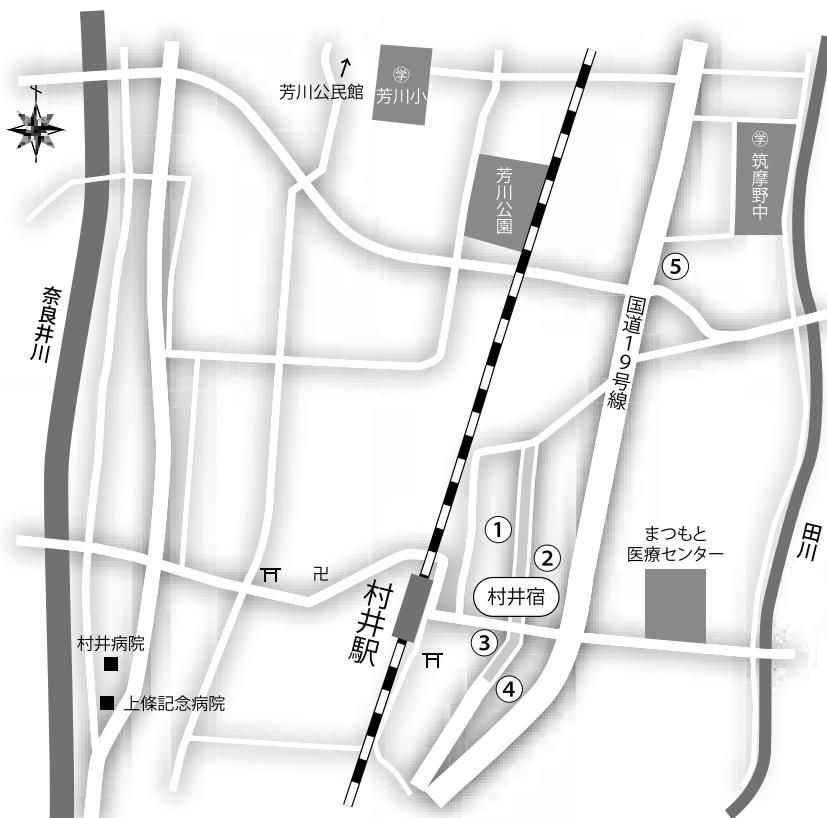
宿場の形成と街道の盛衰

地区紹介

芳川地区は松本市の南部の拠点として、商工農がバランスよく発展してきた地域です。特に江戸時代から現代に至るまで、交通の要衝をしめ、今後も松本市の都市機能・居住誘導区域として発展が期待されています。

ストーリー

北国脇往還(善光寺街道)に五街道に準じて宿場や一里塚が整備されたのは、江戸時代の初期、慶長19年(1614)頃のことです。中山道洗馬の追分から郷原宿を経由して、松本宿に至る中間点に村井宿が位置しています。村井宿の入口には、明治初期に開校された村井学校跡、松本藩の石高変更による口留番所、村井宿高札、若山喜志子の歌碑等があります。番所の前には平安の昔から信仰を集めた村井神明宮があります。明治35年(1902)12月15日に篠ノ井線が塩尻まで全通しました。村井駅は当時の駅舎です。宿場の中程には、松本市重要文化財に指定されている上問屋山村家の祝殿があり、さらに2軒北隣には明治13年(1880)6月25日の明治天皇巡幸の際の御小休所記念碑があります。街道を進みかざの手を過ぎると、村井一里塚跡と芭蕉句碑、相撲取碑があり、平田茶屋には蚕玉神社、小笠原家の筆塚があります。



旧村井宿本陣跡



旧上問屋



旧村井宿高札場跡

①旧村井宿本陣跡 ②旧上問屋 ③旧村井宿高札場跡 ④村井学校跡 ⑤一里塚跡

ポイント

村井宿は、岡田宿と並び善光寺街道の宿場町であり、江戸時代に果たしたそれぞれの役割と明治以降のそれぞれの歩みを比較対比すると、興味深い結果が得られると考えます。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

芳川歴史研究会

【作成】芳川歴史研究会

[関連文化財群のテーマ]

牛伏川の治水

地区紹介

寿地区は鉢伏山麓西側の斜面に展開した地域で、中世末期から近世にかけ水田の収穫率が上昇するに伴って鉢伏山等の入会山からの刈敷の収奪により山は荒廃し、降れば牛伏川等の氾濫に悩まされ、照れば干害に苦しめられた地域です。

ストーリー

記録に残る牛伏川の水害は元禄3年(1690)から明治29年(1896)までに32回発生しました。特に、元禄3年の牛伏川の氾濫は白姫地区を全滅させ、享保16年(1731)の洪水では牛伏川右岸の下瀬黒の集落が全て流されました。繰り返される水害に流域の人々堤防を高くして対応するしかありませんでした。明治18年(1885)から21年(1888)までの内務省による牛伏川水源域の堰堤工事、続く県主導の明治31年(1898)から大正7年(1918)までの護岸工事、山地崩壊防止工事により牛伏川は一応の安定を取り戻します。下流域の寿地区の護岸工事は昭和7年(1932)から昭和29年(1954)迄続けられましたが、堤防の高さは上瀬黒公民館付近では7～8mのままでした。昭和48年(1973)から昭和60年(1985)にかけて白姫地区から田川合流点までの堤防を削り、川底を浚渫し護岸工事が完成しました。矢沢橋端にその喜びを刻した「牛伏川改修記念碑」が建っています。

洪水に悩まされた地区でしたが干害にも悩まされました。明治の初年には竹淵は尾池堤をはじめ4つ、白川は3つ、上瀬黒は1つ、百瀬は1つ、小池は1つ、赤木は4つの溜め池を持っていました。しかし、昭和30年代深井戸掘削によりその役目を終え溜め池は埋め立てられ水田、団地、運動場、公共施設の敷地に代わりました。現在寿地区には7つの堤が残されています。



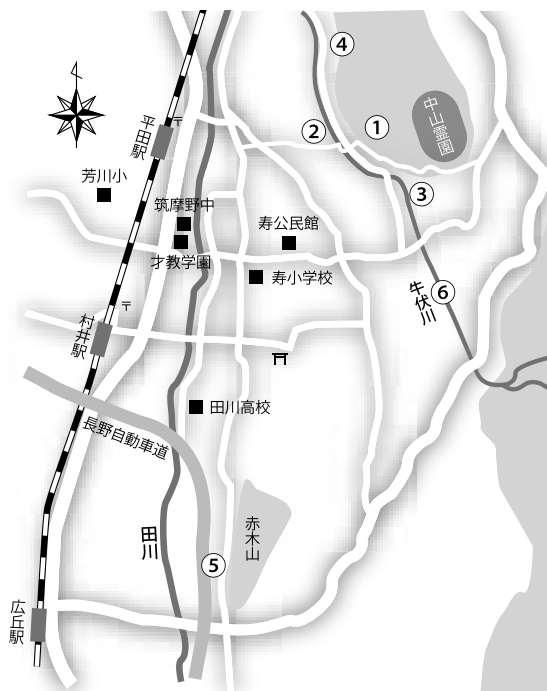
日吉神社



赤木道見堤



牛伏川



竜王池



牛伏川改修記念碑



弥勒堂

①竜王の池 ②牛伏川改修記念碑 ③弥勒堂 ④日吉神社 ⑤赤木道見堤 ⑥牛伏川

ポイント

寿地区内の牛伏川護岸と堰堤は治水関連施設として見るべき価値が大了。上瀬黒矢沢橋付近には「牛伏川改修記念碑」があり、今も上瀬黒村公民館付近では往事の堤防の高さを実感できます。水害によって移動した白姫弥勒堂、下瀬黒日吉神社社殿はその象徴的な建物です。干害対策としての溜め池は小池・赤木・白川に今も残っています。また雨乞いを行なった竹淵諏訪社、上瀬黒竜王の池も忘れてはならない場所です。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体 **寿史談会**

[作成] 寿史談会

寿台地区の文化財

地区紹介

寿台地区は、昭和41年(1966)から昭和47年(1972)にかけて住宅専用開発された比較的新しい地区です。当初は寿地区の一部として行政に参画していましたが、開発により住民が増加し、昭和49年(1974)4月に寿台町会連合会が発足しました。

文化財の紹介

【寿台夏祭り・水御輿】

例年8月第一日曜日に開催されています。昼間は水御輿2基が各町会を、水をかけられながら練り歩く光景が見られます。寿台地区全体が造成で出来た団地で、様々な場所から多くの人々が引っ越して来て暮らし始めた場所です。それぞれの出身地には思い出に残っている春や夏のお祭りがありますが、寿台にはお祭りが無かったため、皆で大いに楽しみ、地区の皆で力を合わせて頑張ろうという気持ちで昭和49年(1974)から始まったものです。2基の神輿は、地区に住んでいた職人さんに作っていただいたものです。水御輿は、夏で暑いから水を掛けようということと、景気も付くという発想から始まりました。また、昔、寿台一帯は桑しかできないような水の無い土地で水争いもあったという歴史を聞き、水御輿にしたら皆喜ぶだろうと考えて始めました。以前は2日間行っていました、今は1日になっています。

【馬頭観音・松の木】

昔は牛馬は農作業において重要な役割を担う大切な存在でした。牛馬が死ぬと各家で馬頭観音を作り祀っていました。かつてはお墓の東側にありましたが、寿台の団地造成の際、道の拡幅も行われたため、馬頭観音が現在の場所に松の木も1本保存されています。成立前の寿台地区の多くは寿小池地籍で、この馬頭観音も寿小池にありました。そのため、かつては、寿小池町会の牛馬を飼っていた人達が、毎年この場所で供養祭をおこない、尼僧を呼んでお経をあげてもらい、食べ物やお酒を持ち寄り、亡くなった牛馬を供養していました。



馬頭観音・松の木



寿台夏祭り・水神輿

①馬頭観音・松の木 ★寿台夏祭り・水神輿

文化財の調査を行った団体

寿台町会連合会理事会・寿台公民館

[作成]寿台町会連合会理事会

【関連文化財群のテーマ】

住宅地造成とコミュニティづくりの歴史

地区紹介

松本平と北アルプスの眺望が良い松原は、昭和40年代から区画整理がはじまり、歩いて暮らしやすい街として計画的に造られました。松原モールと4つの公園が配置され、また金融機関や商業施設も立地し、平成15年(2003)には寿地区から分離し松原地区となりました。

ストーリー

住宅地が造成される前は、地区名のとおり松林が広がっていました。地区の造成前に関するものとしては、旧バス通り、馬頭観音、山之神の碑があります。山之神の碑は、もともと現在の松原中央公園東南部にありましたが、区画整理に伴い、寿白川の諏訪神社境内に移転されました。山之神は春は里に降って田畑を守り、秋は山に帰り山林を守る神として祀られました。

造成後の地区の象徴として挙げられるのが、「松原モール」です。「松原モール」は、新しい街が目指した人と人のつながりを促す仕掛けの1つで、商店などが並び歩行者空間です。松原地区のシンボル「からくり時計台」が立ち、住民の憩いと交流の場として愛されています。

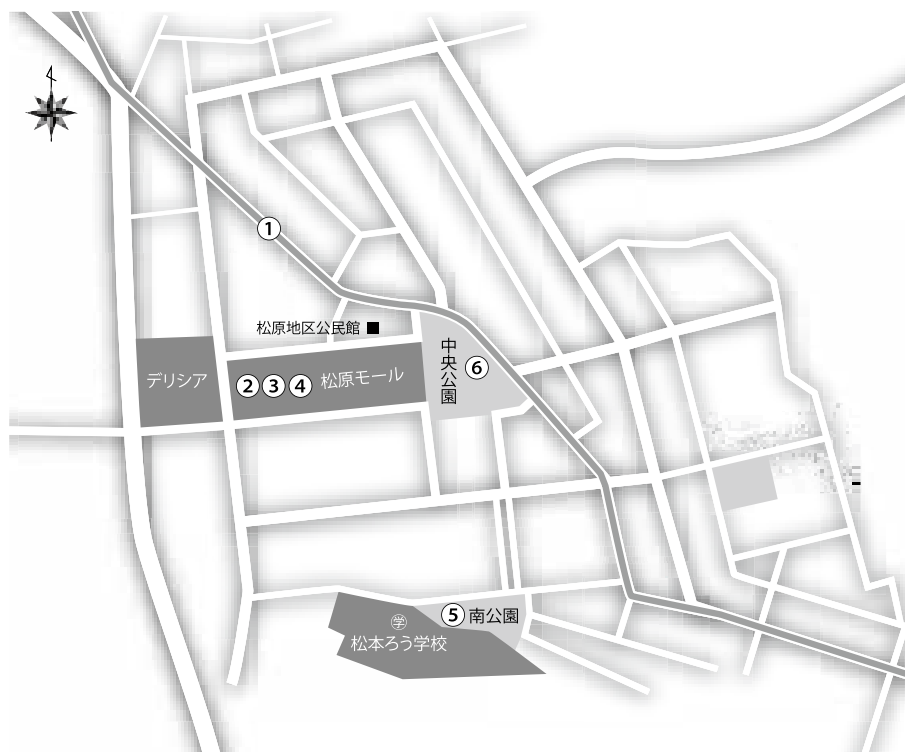
何より、新しい街である松原の「拠り所」となってきたのは地区で行われる様々な行事です。最大のイベントは、7月末に開催される「いいづら祭」です。「松原の街をつくっていく」との思いから、出店も催しも全て地区住民で運営しています。地区住民のきずなの源です。



② 松原モール



③ からくり時計台



①旧バス通り ②松原モール ③からくり時計台 ④宅地造成の碑 ⑤馬頭観音 ⑥いいづら祭 ★山之神の碑(寿白川の諏訪神社境内)

ポイント

新しい街松原地区の宝は人です。地区住民が一から松原地区を築き上げてきました。地区行事や日常でのつながりと、そのつながり作りを後押しする松原モールなどの「当時の都市計画が理想とした街」の両方がそろって松原コミュニティがあります。一方で、造成される以前からの名残も見られます。造成前後の2つの歴史が松原の歴史です。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

松原地区文化財調査委員会・松原地区公民館

〔作成〕松原地区文化財調査委員会

【関連文化財群のテーマ】

岡田の古代から中世につらなる歴史を訪ねて

地区紹介

岡田は古来より東山道、北国脇往還(善光寺道)など主要道路が交差する交通の要衝として発展してきました。奈良・平安期は、発掘された古窯址群から、須恵器の一大生産地で、中央との結びつきも強く、また歴史的な寺社仏閣も数多く建立されました。

ストーリー

奈良・平安期の古窯址群は、岡田田溝池周辺から山田(島内)・大口沢(安曇野市豊科)まで数多く須恵器窯が発掘されています。8世紀後半以降、須恵器の生産地は岡田・安曇野市豊科田沢の東山から芥子坊主山一帯に集中するようになり、県下最大級の須恵器生産地帯を形成していました。この頃、筑摩郡への須恵器の供給の多くをこの一帯の窯でまかなう窯業体制が成立し、9世紀後半まで継続したと考えられます。

654年、於加田(おかた)神社本宮(もとみや)より、岡田芝(柴)宮(岡田神社)への勧請が行われ、中臣鎌足(後に藤原鎌足)が参列したという伝承があります。以降、岡田の中心的役割を果たした岡田神社の参道近くには、平安期に活躍した岡田冠者親義(吾妻鏡)の居館が置かれたとも言われています。岡田冠者親義は、木曾義仲とともに平家追討に参戦し、義仲の入京に大きな役割を担いました。他にも、陸奥鹽竈(しおがま)神社を勧請した塩倉の御宝殿(跡)、海福寺観音堂、大きな伽藍が軒を並べた矢諸(諸久保)普門院観音堂、平安時代の建立と考えられ武田信玄も信仰した慶弘寺(現在は慶弘寺公園)、信蓮社願堂上人が開設の大願寺(跡)など飛鳥時代から鎌倉期に数多くの神社仏閣が建立されています。



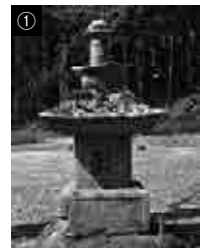
岡田神社



普門院の六地藏



海福寺の観世音菩薩立像



慶弘寺の宝篋印塔



伊深若宮八幡宮



白病舎時代の大願寺

①慶弘寺の宝篋印塔 ②伊深若宮八幡宮 ③大願寺跡 ④岡田神社 ⑤普門院の六地藏 ⑥海福寺の聖観世音菩薩立像

ポイント

この地域は、縄文時代中期の集落が数多く発掘されており、繁栄していたことが推測されます。江戸期には岡田宿として発展し、現在の街並みの基になっています。この地を訪れることで、岡田地区の歴史と文化に触れる数々の遺跡、古墳群、神社仏閣(跡も含む)、石神・石碑など様々な民間信仰などを知ることができます。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

岡田歴史研究会

[作成] 岡田歴史研究会 / 岡田公民館 / 岡田まちづくり委員会教育・文化部会

[関連文化財群のテーマ]

山家氏、小笠原氏と山城

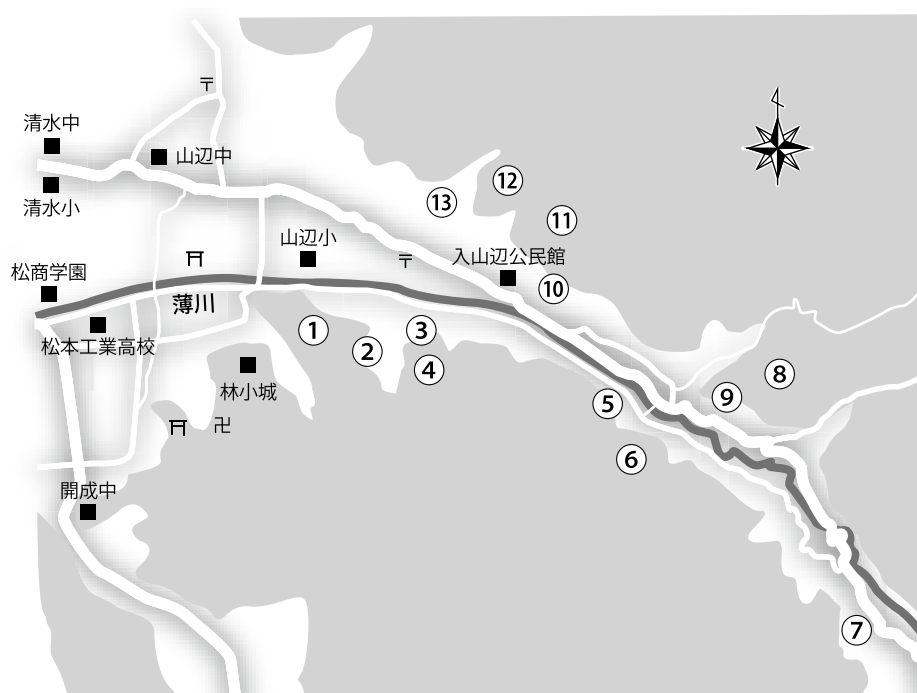
地区紹介

入山辺地区は、松本市東端の美ヶ原高原から流れ下る薄川に沿って古くから開けた地域です。かつては林業・養蚕などが盛んでしたが、現在はブドウを始めとする果樹栽培が広く行われ、豊かな自然と歴史的遺産・文化財の多く存在する地区です。

ストーリー

中世の山辺郷の地頭は山家氏で、南北朝時代には桐原を除く山辺一円を領していました。山家氏は諏訪社とのつながりが深く、そのため各地に諏訪の神を祭る社が置かれ、お船祭りや御柱祭りなど諏訪の文化がもたらされました。また、桐原の郷の領主であった桐原氏によって勧請された天満宮や、御院領の桐原郷の鎮守とされる柴宮社の起源も中世に求めることができます。徳運寺(現在は徳運寺)は、元弘元年(1331)山家氏が、諏訪の慈雲寺から雪村友梅を招いて開基した寺院です。

山辺の谷の中世を特徴づけるものは、各地に残る山城の遺構で、山家氏と桐原氏及び後の支配者小笠原氏に関係したものです。林大城・小城は、信濃守護小笠原氏の本城で、その東側に位置する水番城は、林大城への水の守りにあつた城とされます。桐原城は、桐原郷の地頭桐原氏の城で、後に小笠原氏が支配するところとなり、谷を隔てた東方の霜降城はその支城とされます。山家城は、山家郷の地頭山家氏の山城で、薄川の対岸の宮原城は支城と言われ、後に小笠原氏が支配するようになります。



林大城跡



大和合神社(御柱)

- ①林大城跡 ②橋倉諏訪神社 ③南方諏訪神社 ④水番城跡 ⑤宮原神社 ⑥宮原城跡 ⑦大和合神社 ⑧山家城跡 ⑨徳運寺 ⑩天満宮
⑪霜降城跡 ⑫桐原城跡 ⑬柴宮神社

ポイント

古刹の風格も感じられる徳運寺は、本堂・庫裏・山門及び高塀の3点が国の登録有形文化財に登録されています。また山城の中では、桐原城・山家城・林小城が、遺構がよく残された長野県を代表する山城として、県史跡に指定されています。林大城は、井川城跡とともに「小笠原氏城跡」として平成29年(2017)2月9日国史跡に指定された規模の大きな山城です。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

入山辺地区歴史文化愛護会・山辺歴史研究会

[作成]山辺歴史研究会

【関連文化財群のテーマ】

林城下の遺構

地区紹介

里山辺地区は、美ヶ原高原を背に、薄川の中流部に南北に広がる歴史豊かな地区です。特に林町会は地区の南部に位置し、戦国時代に小笠原氏が本拠地を置き松本平一帯の経営にあたりました。

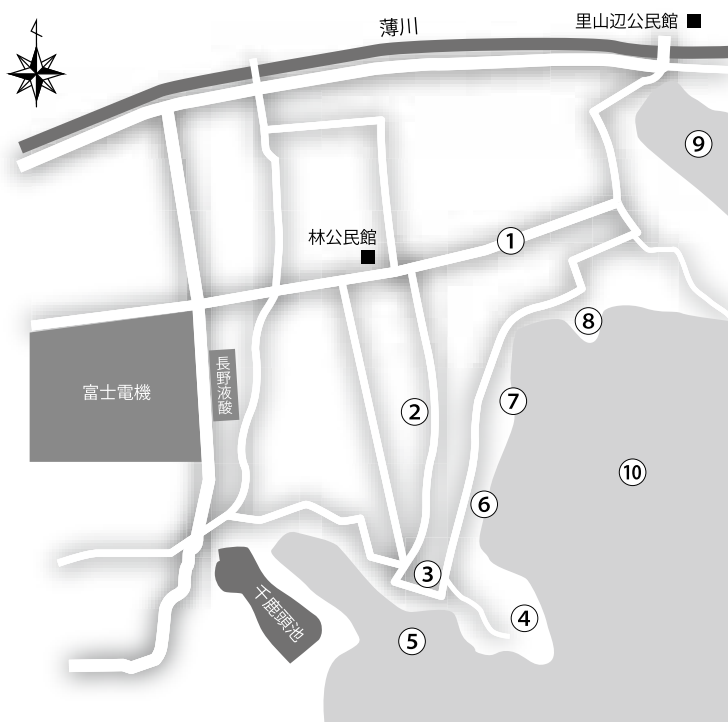
ストーリー

信濃守護となった小笠原氏は府中進出の足がかりとして、田川と薄川の合流点付近に「井川館」を築きました。しかし、同族間の争いや水害等に悩まされ、より強固な備えの可能な林の地に小笠原清宗の時代、城郭を築いたとされます。築城時期は15世紀頃と考えられます。以来、小笠原長時が1550年武田氏の侵攻の前に自落するまで間、「林城の時代」は続きました。

この間、要害城の林大城と小城に囲まれた地(大嵩崎地区)に館を築き、初期の「城下町」の構築を行ったものと言われています。

要害城の林大城は城郭の形態がよく残り、平成29年(2017)に国の史跡に指定されました。林地区内には上手町、立町、横町の地名が今に残り、小笠原氏の菩提寺である廣澤寺を始めとして祈願所の千鹿頭社等多くの史跡が残ります。

室町期の守護の館としての「井川」から戦国期の城郭としての「林城」、更に戦国末期から江戸期の「松本城」への変遷を語る上で欠かすことのできない遺構です。



廣澤寺



林大城跡



千鹿頭社(左)・千鹿頭神社(右)



林小城跡



旧浄蓮寺跡

- ①蔵造りの街並通り ②旧薬医門移築 ③兎田旧跡 ④廣澤寺 ⑤千鹿頭社 ⑥旧浄蓮寺跡 ⑦旧浅間社跡
⑧竹溪庵跡(林薬師堂跡) ⑨林大城跡 ⑩林小城跡

ポイント

小笠原氏の菩提寺である廣澤寺は、明治時代の廃仏毀釈運動の中で、山辺地区で唯一廃寺をまめがれた寺で、伽藍が良く残っています。千鹿頭社は江戸初期の領地分割により、松本藩(林地区)の千鹿頭社と高島藩(神田地区)の千鹿頭神社の二社が併置される珍しい形態です。その他、地区内では、本棟造りの家が多く残る風景や土蔵造りの町並みなど、美しい景観が見られます。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

林古城会(山辺歴史研究会)

[作成]里山辺地区文化財調査委員会

[関連文化財群のテーマ]

悠久の歴史の中で

地区紹介

今井地区は松本市の西南端に位置し、信州まつもと空港、県営陸上競技場、県営サッカー場「アルウィン」等が在ります。また、市内でも有数の農業地帯で、水田、果樹、野菜等を中心とした農業が行われ、それら生産物を直売する道の駅「今井恵みの里」は連日賑わっています。

ストーリー

今井に人跡が確認されるのは、新石器時代にまで遡ります。今井の各地で尖頭器が発見され、この地に人々の往来があった事が確認できます。しかし、定住の跡が確認されるのは、縄文時代早期の「こぶし畑遺跡」です。この複合遺跡の発掘により、縄文早期から平安に至る祖先の営みが確認されました。今井四郎兼平の開拓伝承、中世の開発、幕藩時代、近代といった地区の歴史も、残された数々の文化財により覗くことができます。

今井は、扇子川の流れと共に開けてきたと考えられます。扇子川の流路は自然・人工的等、諸説ありますが、この流れこそ今井の命の源でした。鎖川を巡る上流三ヶ村との水争いも、扇子川にいかにも多くの水を流すかが根幹にあったのではないのでしょうか。扇子川の水を利用した水田耕作が中心であった時代、進んで養蚕主体の時代、大根工場繁栄の時代、一戸一反・農魂の開田の時代、そして果樹、野菜中心の現代へと、今井地区を支える生業は様々に変遷してきました。中世から近世、三村氏の影響下、松本藩の治世、高遠藩、幕府直轄、明治維新へと、目まぐるしく変わる時代の中でも、脈々と我々の祖先は歴史を刻んで来たのです。



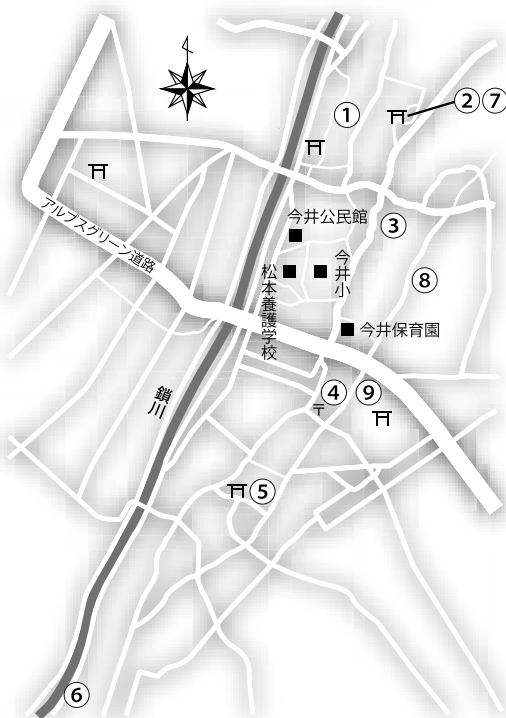
⑤ 続麻・兼平神社



⑥ 扇子川取水口



⑨ 仁王塚



① こぶし畑遺跡



今井四郎兼平形見石



正覚院

- ①こぶし畑遺跡 ②今井四郎兼平形見石(諏訪神社内) ③正覚院 ④宝輪寺 ⑤続麻・兼平神社 ⑥扇子川取水口
⑦諏訪神社の御神馬 ⑧下新田の事八日 ⑨仁王塚

ポイント

祖先がこの地に住み出して以来、幾多の困難を乗り越えて作り出した故郷今井。「廃仏毀釈」の危機から救われた文化財。今井が一つになった今井村の成立、郷土の誇り上條蝋司、旧陸軍松本飛行場跡等戦争の遺跡、故郷を深く知らしめる「古文書」や史跡等、未来永劫、引き継いでいくのが我々の使命と考えております。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

今井地区文化財委員会

【作成】今井地区文化財調査委員会(今井地区文化財委員会へ改編)

【関連文化財群のテーマ】

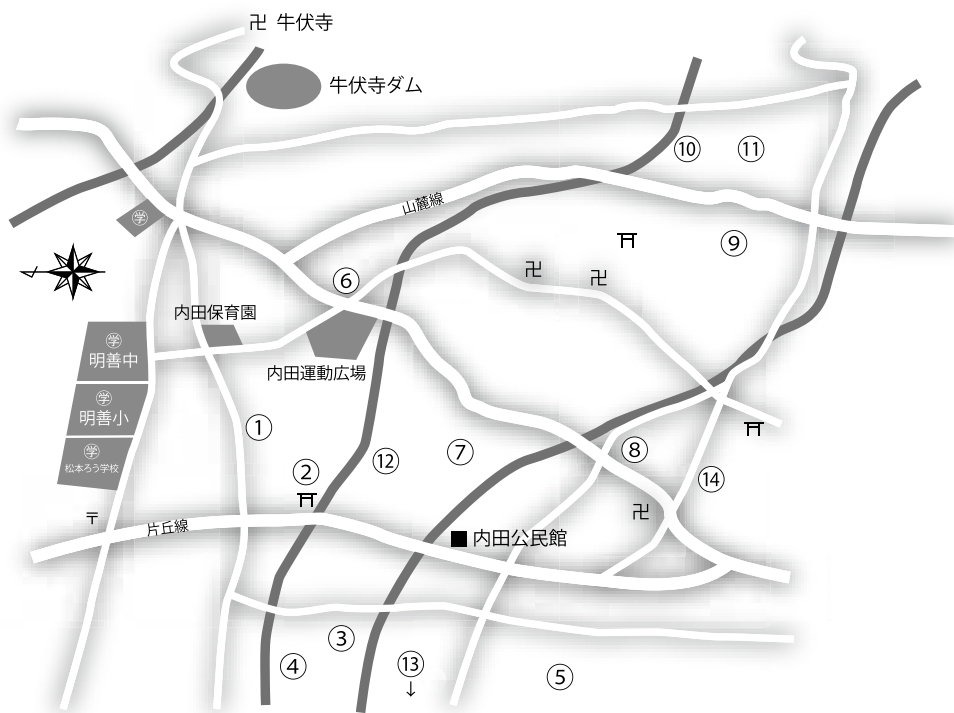
縄文集落のムラ

地区紹介

内田地区は鉢伏山の西山麓斜面にあり、松本平を眼下に臨み、北アルプス連山の眺望が素晴らしい松本市の南東部に位置する田園地帯です。当地区には遺跡・史跡・伝統文化などが多く残っていることから、太古より人が住むのに適した土地であったことが窺えます。

ストーリー

崖の湯の両麓を流れる塩沢川と舟沢川が形成する複合扇状地には、縄文の昔から大きな集落が営まれてきました。「雨堀遺跡」の名前の元となった「あんぼり」は、雨水が滞留する谷地形のことで、農業構造改善事業により消滅してしまいましたが、ここに縄文中期の大集落がありました。時代と共に集落は下流に移り、塩沢川と舟沢川の合流点付近には、2,500点にも及ぶ耳飾りを含む土偶等の祭祀遺物が出土したエリ穴の大集落がありました。弥生期の横山城遺跡の集落跡からは、籾痕土器が見つかり稲作の定着を裏付けています。また布目痕を持つ土器も出土しており、この地域の初期、またはこれに続く時期には、すでに織物があったことを物語っています。弥生時代の集落の中心は、田川沿いの寿地区に移りますが、埴原牧が置かれた頃には、再び集落が営まれるようになりました。中世になると北内牧が置かれ、地頭の波多氏の支配となりますが、鎌倉時代の終わりには、牧が廃され農地へと変わっていきました。室町・戦国の世には村間の山論と水論が絶えることなく、当時信濃国を支配していた武田氏の裁定を仰ぎました。江戸時代には、中山・寿と共に諏訪高島領となりますが、村間の山論と水論は絶えませんでした。



エリ穴遺跡出土の耳飾り



砂原遺跡



雨堀遺跡

- ①八幡原遺跡 ②クネノ内遺跡 ③エリ穴遺跡 ④一ツ家遺跡 ⑤横山城遺跡 ⑥釈迦堂遺跡 ⑦清心遺跡
⑧砂原遺跡 ⑨雨堀遺跡 ⑩五斗林遺跡 ⑪三郎城遺跡 ⑫長泉寺遺跡 ⑬松山遺跡 ⑭藪沢池(宮ノ下)遺跡

ポイント

縄文早期の五斗林、縄文前期の清心・釈迦堂・三郎城・砂原・藪沢池(宮ノ下)等、縄文中期の雨堀・一ツ家、縄文後期のエリ穴、弥生時代の横山城等の各遺跡群は復元されていませんが、その立地場所から当時の状況が窺えます。また、これら遺跡群とともに重要文化財に指定されている馬場家住宅・牛伏川階段工および牛伏寺の仏像群を巡ることも可能です。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

内田地区地域文化財協議会

[作成] 内田地区地域文化財協議会

[関連文化財群のテーマ]

温泉文化と養蚕

地区紹介

本郷地区は松本市の北東に位置し、美ヶ原の武石峠、三才山峠などを源にした女鳥羽川が地区の中央を流れています。女鳥羽川上流には神が降りる磐座(いわくら)として崇められている烏帽子岩があり、地区の中心部には、古い歴史を持つ浅間温泉があります。

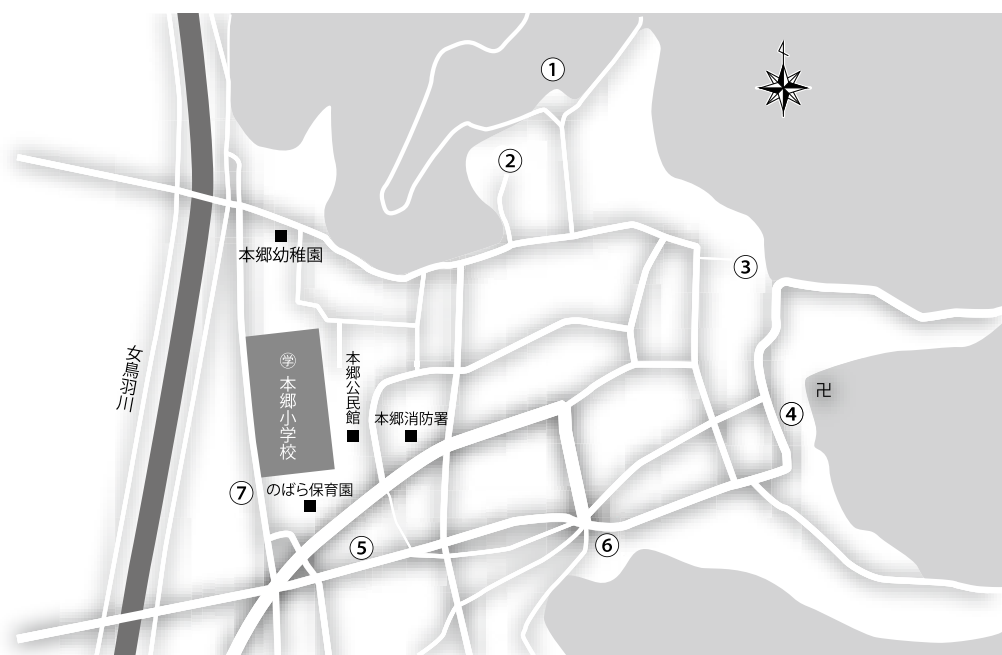
ストーリー

「松本の奥座敷」と呼ばれる浅間温泉の歴史は古く、『日本書紀』にある天武天皇が行宮(あんぐう)を計画した「束間の湯」は、浅間温泉から湯ノ原にかけてあったのではないかとされています。江戸時代に石川氏が保養のための御殿を造ってからは、歴代松本藩主と深い関わりを持つようになります。それ以降、善光寺参りの旅行者や湯治客、文人墨客が多く訪れ湯宿が増えましたが、その多くは農業との兼業でした。

明治中期、温泉の熱を利用した蚕種が浅間温泉の特産品となります。蚕種の取引で県内外からの宿泊客が増え、浅間温泉は全国に知られる温泉街へと発展しました。大正13年(1924)に浅間線電車(チンチン電車)が開通するとますます景気が良くなり、旅館も蚕種製産との兼業から旅館業主体となり、浅間温泉周辺には県営野球場や陸上競技場、更に昭和になると競馬場や温泉プールなども整備されました。

戦争末期には、浅間温泉に滞在して松本飛行場で出撃訓練を重ねていた特攻隊員と、「鉛筆部隊」と言われた東京からの疎開児童との交流があり、温かく悲しい歴史物語として語り継がれています。

現在は、松本市野球場、かりがねサッカー場、美鈴湖自転車競技場などのスポーツ施設の整備が進み、温泉だけではなく新しい魅力と発展を見せています。



松門文庫



与謝野晶子歌碑(神宮寺)

①御射神社(蚕玉祭) ②神宮寺 ③湯薬師 ④西宮恵比寿神社 ⑤下浅間の薬師堂 ⑥庚申堂 ⑦松門文庫 ★与謝野晶子歌碑(神宮寺)

ポイント

現在の浅間温泉では蚕種業が盛んだった時代の面影を見ることはできませんが、往時から残る木造3階建て旅館や文人墨客の句碑や歌碑が数多くあります。松本城主水野家の菩提寺・玄向寺や神宮寺、小笠原家廟所、薬師堂、天満宮、松明(たいまつ)祭りで有名な御射(みさ)神社などもあり、まち歩きをしながら歴史散歩をすることができます。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体 **本郷公民館**

[作成]本郷公民館

【関連文化財群のテーマ】

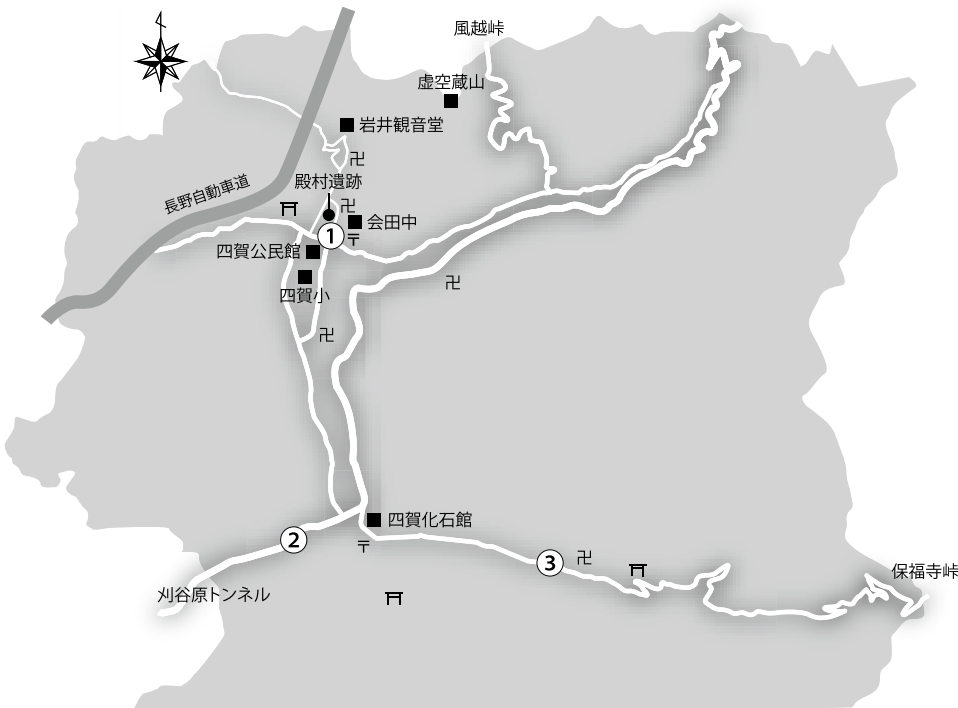
街道と宿場

地区紹介

四賀地区は松本市の北東に位置し、1,000m級の山々に囲まれた盆地で、かつては嶺間(れいかん)と呼ばれていました。昭和30年(1955)に4カ村が合併して四賀村となり、平成17年(2005)に松本市に合併しました。

ストーリー

地区内には、古代文化の大動脈である東山道の本道(岡田から稲倉峠を越え、東進して保福寺峠を越えるルート)と支道(錦部から分岐し会田を経て北に向かうルート)が通っていました。鎌倉時代には、伊勢神宮内宮の領地「御厨」となり、戦国時代は、交通の要衝から多くの山城が築かれ、上杉氏と武田氏の接点でありました。江戸時代に東山道の本線は保福寺を通り江戸街道として参勤交代の道となり、支道は善光寺街道として踏襲され、保福寺宿、刈谷原宿、会田宿の3つの宿場が置かれ、鉛鉱山開発により殿野入、赤怒田、反町が幕府領(天領)とし金山町が形成されました。享保10年(1725)からは、地区全域が幕府領(天領)となり、明治時代を迎えました。幕府領であったため、大政奉還により伊那県となり、明治3年(1870)10月から明治4年2月頃にかけて全国でも屈指の激しさで行われた松本藩の廃仏毀釈運動から逃れることができ、今も中世からの寺院が残っています。加えて、四賀地区は交通の要衝として栄え、石造物等の文化財が多く残っている地域です。また、明治24年(1891)に松本入りしたイギリス人宣教師であり、日本アルプスの山などを紹介した登山家ウォルター・ウェストンの保福寺峠越えは有名です。



① 会田宿



③ 保福寺番所跡

①会田宿 ②刈谷原宿 ③保福寺宿

ポイント

太古より人々が居住し、江戸時代には会田・刈谷原は善光寺街道、保福寺は江戸街道の宿場として栄えていました。平成13年(2001)7月に会田宿町並み委員会が結成され、四賀地区のシンボルである虚空蔵山(別名：会田富士1,139m)の山城や会田宿周辺の宿场景観づくり事業を行ってきました。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体 **四賀公民館**

[作成]四賀地区歴史文化委員会

【関連文化財群のテーマ】

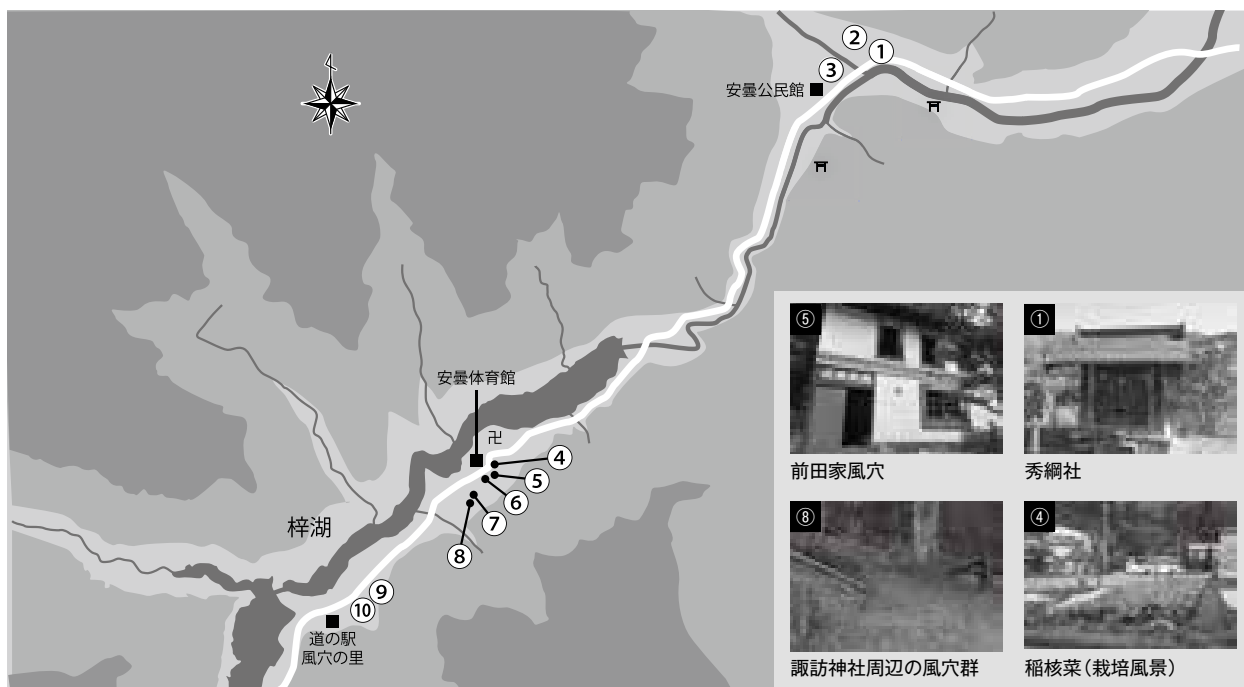
稲核の風穴と生業

地区紹介

安曇地区は松本平の西方にあり、槍ヶ岳や穂高連峰、乗鞍岳など3,000mを越す雄大な山岳に囲まれています。上高地をはじめとする美しい自然や、かつての野麦峠街道や鎌倉往還等の歴史を有する地区です。

ストーリー

稲核には、鉢盛山から延びる尾根の麓から吹き出す冷気を利用した「風穴」と呼ばれる江戸時代中期から使われ続けている貯蔵施設があります。文久年間(1861～1864)に前田喜三郎氏が蚕種の保存に風穴が適していることを発見し、究理法を発明したことにより、稲核の風穴は、蚕種の保存庫として利用されるようになりました。明治40年(1907)、稲核にいち早く郵便局が開設されると、全盛期には蚕種出荷時期連絡の為、稲核郵便局の電信取扱数が松本局を上回ったとも言われています。現在、風穴は漬物や酒類の保管に使用されていて、安曇地区の特産である信州の伝統野菜・稲核菜を漬物にして保存している家が多くあります。初冬には、地区内の水場に結の人々が集まり、漬物にするための稲核菜を洗う風景が見られます。また、稲核地区以外にも風穴は存在し、現在も保存庫として利用されているものがあります。また、養蚕の神様として親しまれる三木秀綱公にまつわる伝説など、風穴を利用した養蚕が盛んであった安曇地区は、民話にも養蚕と縁の深いものがあります。



- ①秀綱社 ②風穴 ③湧水 ④稲核菜(栽培風景) ⑤前田家風穴 ⑥稲核郵便局跡 ⑦水場(水道)
⑧諏訪神社周辺の風穴群 ⑨風穴(風穴の里) ⑩安曇資料館

ポイント

風穴は稲核以外にも見られ、現在も保存庫として利用されているものがあります。風穴の里にある風穴は、平成20年(2008)に稲核町会が払い下げを受け、県の補助金を活用してリニューアルしました。ここには、漬物や日本酒が貯蔵されており、見学者が多数訪れています。現在は、風穴ブランドの日本酒を売り出している企業もあります。風穴庫内は、夏場8℃、冬季は-6℃と温度の上下を繰り返します。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

安曇地区歴史文化基本構想文化財調査委員会

【作成】安曇地区歴史文化基本構想文化財調査委員会

【関連文化財群のテーマ】

街道から生まれた奈川の歴史文化

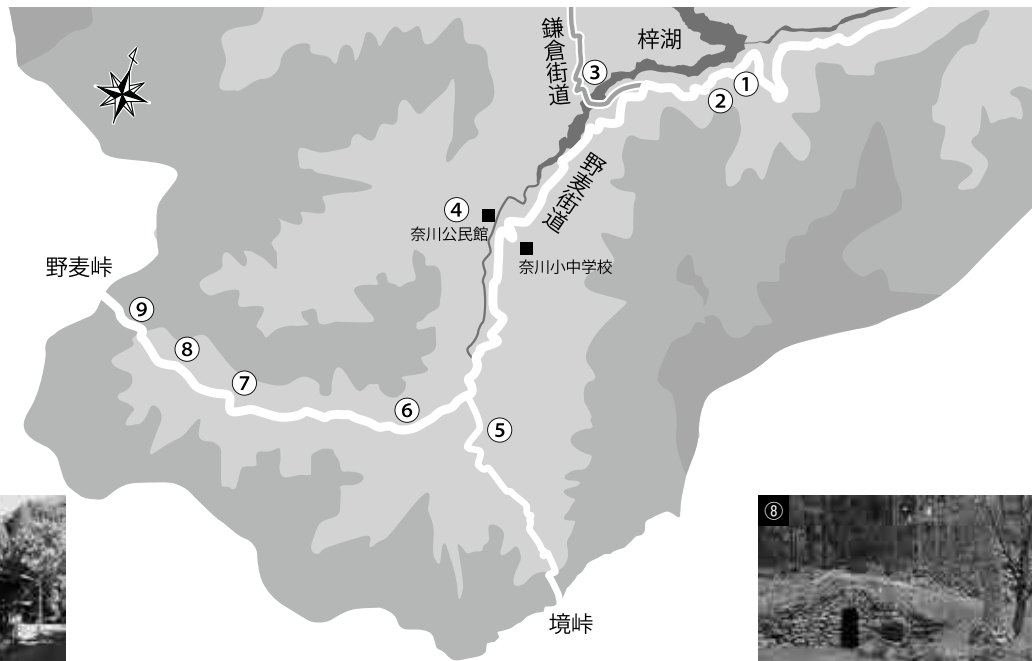
地区紹介

奈川地区は梓川の支流である奈川によって形成された溪谷にあり、西に乗鞍岳、東に鉢盛山を仰ぐなど、周囲を2,000m以上の山々に取り囲まれています。松本城下、伊勢町を起点に奈川を通過し飛騨へ向かう野麦街道が地区を縦断しています。

ストーリー

中世より、飛騨国と信濃国を結ぶ主要路の野麦街道があり、この街道から多くの歴史文化が生まれました。尾張藩の庇護のもと発達した尾州岡船(びしゅうおかふね)と呼ばれる牛稼ぎは、経済的に村を支えただけでなく、稼業の担い手である牛の安全・成仏を願い、多くの石造物を建立しました。また、道中で歌い覚えた民謡が奈川追分として生まれ歌い継がれています。

この街道は冬季は大変厳しく、多くの旅人が遭難したり命を落としました。旅人の避難所として作られた石室(復元)や供養塔は、奈川の旅人への思いやりが偲ばれる歴史遺産です。宝来屋、扇屋などの旅籠は、飛騨から岡谷の製糸工場への工女の往来を伝える遺産として復元されました。これらの建物は、玄閑脇に馬屋を置く構造で、牛馬と伴に暮らす奈川の家の特徴が現われています。奈川は5つの峠に囲まれた閉鎖的な地域ですが、木曾と同じく尾張藩の支配下に置かれた時代が長く、木曾小木曾の方言と共通する点が多く見られます。また、峠にまつわる秀綱伝説、峠を越えて来た御嶽講は野麦街道に沿って広がっています。地区に伝わる「奈川獅子」は、富山から奈川に来た横井市蔵の教えにより、100年を超え踊り継がれています。



旅籠松田屋



石室・石碑(南無観世音菩薩)

- ①嶮道新造塔 ②旅籠松田屋 ③秀綱神社 ④小山原石造物群 ⑤寄合渡石造物群 ⑥神谷馬頭観音 ⑦女工宿扇屋
⑧石室・石碑(南無観世音菩薩) ⑨旧野麦街道

ポイント

毎年5月に行われる「野麦峠まつり」は、野麦街道を通り諏訪地方へ糸引き稼ぎに多くの若い娘たちが往来した当時を偲ぶ記念山行です。野麦峠の麓には厳しい冬の遭難から旅人を守った「石室」や、工女宿「扇屋」が復元されています。「尾州岡船」は奈川に多くの牛稼ぎを生み、旅程を伴にした牛の安全祈願と供養の石造物が街道筋に点在しています。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

奈川歴史文化調査隊

[作成] 奈川歴史文化調査隊

【関連文化財群のテーマ】

梓川の恵みと西牧の経営

地区紹介

日本一長い信濃川の源流梓川が島々谷を流下し、八景山集落が扇の要となる扇状地を造りました。東西に細長いこの地が梓川地区です。西の里山地帯では、縄文草創期の遺物が発見されており、時代が下ると牧も経営されました。今は、西の里山地帯はリンゴの産地として、東の平野部は住宅地として発展しています。

ストーリー

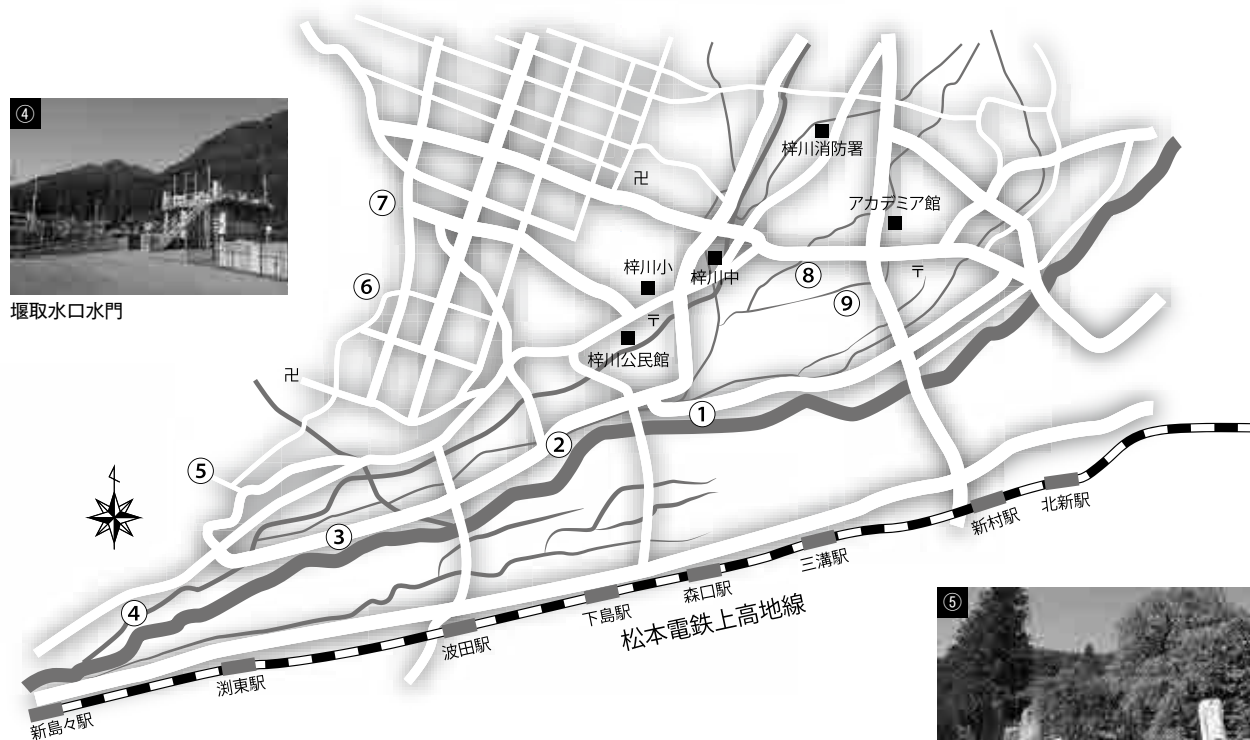
平安時代、東信地方から滋野氏という氏族が梓川の上野に入郷します。滋野氏は東信濃における古代からの氏族で、東信地方から上野に移住すると、梓川地区の山麓地域にあった古幡牧を経営していました。古幡牧は国府の西方にあった牧であることから、西牧ともいわれ、滋野氏は、後に土地の名前をとって西牧氏と称するようになったといわれています。

安曇野南部にあった住吉庄の開拓には、梓川からの用水の開削が不可欠ですが、この事業には、梓川左岸を抑えていた西牧氏が関わっていたのではないかと推測されます。梓川から取水した堰の開削は立田堰が最も古く、中心となる庄野堰は11世紀後半に造られました。それぞれの堰取入口は、昭和25年(1950)の梓川頭首工完成以降も予備用水路として利用されましたが、県営圃場整備事業以降は埋め立てられ、跡地には「水神記念碑」が建立されています。

鎌倉時代初期には、滋野氏(西牧氏)の安泰を願い、真光寺の木造阿弥陀如来座像が造られました。14世紀前半、この住吉庄に小笠原氏が地頭として赴任すると、西牧氏は金松寺山に続く城山に西牧城を築いて対抗しました。



堰取水口水門



- ①庄野堰取水口跡水神 ②矢橋水神 ③古ぬる堰取水口跡碑 ④堰取水口水門
⑤真光寺 ⑥若宮八幡宮 ⑦大宮熱田神社 ⑧大妻氏館跡 ⑨岩岡氏館跡



真光寺

ポイント

西牧氏に関連する文化財は地区内に多くあります。西牧氏の治績は、古幡牧と降旗田圃を引き継ぎ、横沢堰をはじめとする用水堰を掘削し、住吉庄を開拓するなど農業の発達に尽力したことにあります。西牧氏は、真光寺を中興し、金松寺などを開基します。真光寺にある国の重要文化財木造阿弥陀如来座像と両脇侍像は、西牧氏の寄進によるものです。

関連文化財群の案内・解説が可能な団体

梓川地区まちづくり協議会

〔作成〕梓川地区まちづくり協議会

【関連文化財群のテーマ】

古代の開発 大野牧と秦(波多)氏と若澤寺の成立

地区紹介

波田地区は松本平の西に位置し、鉢盛山の支脈唐沢山と白山麓に広がる扇状地と、梓川河岸段丘から成り、山地80%居住地と耕地等が20%を占め、住宅や田畑は900m～600mの傾斜平地にあります。地区の東西には国道158号と電鉄が縦横しています。

ストーリー

筑摩郡には初期荘園の大野庄が存在していました。加えて、平安時代、朝廷の御牧の一つである大野牧が波田・安曇・山形村一帯に置かれたと推定されているほか、この大野牧を秦氏が支配していたとする説もあります。

市の特別史跡に指定されている元寺場跡は、若澤寺の前身と伝えられ、神仏一体で信仰された時代に、山岳信仰のためにつくられた山岳寺院跡と推測されます。若澤寺は、室町時代に2kmほど山中に入った元寺場から現在地(市特別史跡若澤寺跡)に下り、戦国時代から江戸時代初期には武田勝頼や小笠原氏により寺領を安堵されました。江戸時代には広大な伽藍が整備されて多くの人々が訪れ、若澤寺は「信濃日光」と呼ばれていました。上波田阿弥陀堂前にある県宝金剛力士像は、鎌倉期末、源重久(源姓波田氏)が善光寺仏師妙海に造らせ、若澤寺の塔頭西光寺に寄進したものです。この金剛力士像の股をくぐるとハシカが軽く済むと古くより信じられ、今も4月には股くぐり祭りが行なわれています。

波田神社から上波田・中波田方面へ向かう道沿いは、若澤寺の門前とされ、また信濃国と飛騨国を結ぶ交通の要衝として15世紀には波田山城や榎木城が築かれました。



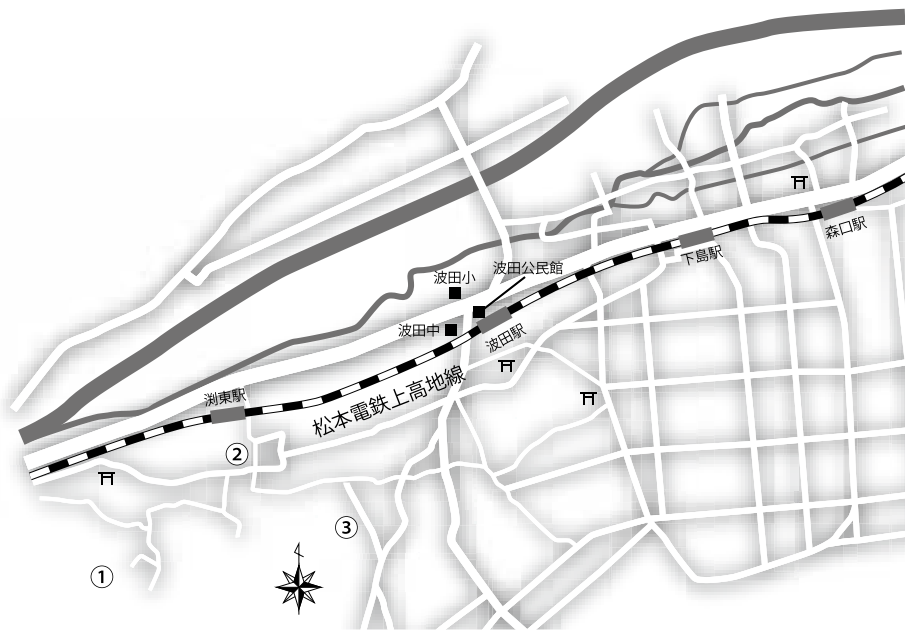
① 若澤寺跡



② 田村堂



③ 盛泉寺



①若澤寺跡 ②田村堂 ③盛泉寺

ポイント

波田地区の文化財群めぐり3コース ①《国重文の田村堂周辺》県宝仁王門の金剛力士像。松本市重文の阿弥陀如来像や石像柯群。波多神社小檜(樹齢900年)西光寺跡の町並み ②《盛泉寺》県宝の銅造菩薩半跏像、同御正体(懸仏)、市重要文化財の水沢不動明王立像、同金亀多宝塔、真言相師像、線彫六地藏石仏、水沢観音堂 ③《若澤寺跡—波多山城》

関連文化財群の案内・解説が可能な団体 **波田歴史愛好会(波田公民館)**

[作成] 波田地区文化財調査委員会



各地区が設定した
関連文化財一覧



この一覧表には、主に平成27年度末(2016年3月)時点で、各地区が設定した関連文化財群のタイトルを掲載しています。本ハンドブック作成にあたり、より分かりやすくするため、タイトルを修正する、複数の関連文化財群を統合するなどの作業が設定した地区によって行われたものがあります。そのため、紹介した関連文化財群のテーマと、一覧のタイトルが一致しない場合があります。

各地区が設定した関連文化財一覧

| 地区 | | 関連文化財群テーマ |
|----|----|----------------------|
| 1 | 第一 | 城下町 |
| 2 | 第一 | 城下町の信仰とお祭り |
| 3 | 第一 | 城下町の商家の暮らし |
| 4 | 第一 | 火伏の神様 |
| 5 | 第二 | 城下町の商人の信仰 |
| 6 | 第三 | 人々の生活を支える湧水 |
| 7 | 第三 | 蚕業革新の中心地 |
| 8 | 東部 | 川と湧水が育んだ産業 |
| 9 | 東部 | 城下町松本 |
| 10 | 東部 | 松本裏町の花街文化 |
| 11 | 東部 | 松本近現代の軌跡 |
| 12 | 東部 | こどものせかいと民俗信仰 |
| 13 | 東部 | 西洋館の変遷 ～ 立石清重とその精神 ～ |
| 14 | 中央 | 国宝松本城とその周辺をめぐる文化財 |
| 15 | 中央 | 大正ロマンのまち 上土 |
| 16 | 中央 | まつもとの文化の礎 |
| 17 | 中央 | 水めぐる城下町 |
| 18 | 城北 | 古代より人々の集うまち |
| 19 | 安原 | 城下町の生活用水 |
| 20 | 安原 | 城下町の武家・商家の街 |
| 21 | 安原 | 明治以降の町の変遷 |
| 22 | 安原 | 明治史跡と再開発施設 |
| 23 | 安原 | 景観樹の保全 |
| 24 | 安原 | 信仰のあかし |
| 25 | 安原 | 近代化の先駆者 |
| 26 | 城東 | 松本城の鬼門封じの神社仏閣群 |
| 27 | 白板 | 古代の開発と放光寺 |
| 28 | 白板 | 川と交通 |
| 29 | 田川 | 交通の要の地域(交通と物流) |
| 30 | 田川 | 水の豊富な地域(水利と水害) |
| 31 | 田川 | 民間信仰とコミュニティの形成 |
| 32 | 庄内 | 小笠原氏ゆかりの社寺 |
| 33 | 庄内 | 善光寺道沿道の文化財 |
| 34 | 庄内 | 洪水防御の遺構 |
| 35 | 庄内 | 江戸期の処刑場跡 |
| 36 | 庄内 | 住民の祈りと伝統行事・風習 |
| 37 | 鎌田 | 信濃守護小笠原氏の井川城跡 |
| 38 | 鎌田 | 近代の開発 |
| 39 | 鎌田 | お八日念仏と足半草履 |
| 40 | 鎌田 | 伝統行事の継承 |
| 41 | 松南 | 弘法山古墳を造った集落 |

| 地区 | | 関連文化財群テーマ |
|----|----|----------------------------|
| 48 | 島内 | 古代の島内 |
| 49 | 島内 | 犬飼島の開発と経営 |
| 50 | 島内 | 街道と水 |
| 51 | 島内 | 島内の天然記念物・他植生巨木 |
| 42 | 中山 | 古墳の宝庫 |
| 43 | 中山 | 勅旨牧から私牧へ |
| 44 | 中山 | 埴原城と中世の中山 |
| 45 | 中山 | 東五千石のムラ |
| 46 | 中山 | 石と伝説 |
| 47 | 中山 | ムラの信仰 |
| 52 | 島立 | 島立発展の礎となった“三街道” |
| 53 | 島立 | 地区に五穀豊穡をもたらす豊かな“水” |
| 54 | 島立 | 寺社とまつり |
| 55 | 新村 | 水田を潤す五堰と物くさ太郎伝承 |
| 56 | 新村 | 野麦街道と集落と集落を結ぶ里道に往時をしのぶ |
| 57 | 新村 | 筑摩鉄道の開通と山王集落(駅前集落)・下新銀座の形成 |
| 58 | 新村 | 家族同様の馬・農家の暮らしを豊かにした蚕 |
| 59 | 新村 | 神仏に祈り願掛けをしてきた人々 |
| 60 | 新村 | 寺子屋から近代学校開校、松商短大(松本大学)誘致 |
| 61 | 和田 | 和田の用水 |
| 62 | 和田 | 和田の社寺と民間信仰 |
| 63 | 和田 | 和田の文化と教育 |
| 64 | 神林 | 街道が育む歴史 |
| 65 | 神林 | 水が繋ぐ神林の歴史 |
| 66 | 笹賀 | 水を制した村の信仰 |
| 67 | 笹賀 | 平和の誓い |
| 68 | 芳川 | 宿場の形成と街道の盛衰 |
| 69 | 芳川 | 四ヶ堰と芳川 |
| 70 | 芳川 | 芳川地区の神社・寺院と伝承行事 |
| 71 | 芳川 | 子どもたちの教育のはじまりと変遷 |
| 72 | 寿 | 今に伝わる原始・古代の遺産 |
| 73 | 寿 | 信仰の中核であった寺社と牛伏寺信仰 |
| 74 | 寿 | 小笠原氏と武田氏の攻防 |
| 75 | 寿 | 中世白川氏と赤木氏の展開 |
| 76 | 寿 | 五千石街道と中馬・手馬 |
| 77 | 寿 | 牛伏川の治水 |
| 78 | 寿 | 現代の寿の開発 |
| 79 | 寿 | 高島藩と旗本諏訪頼久の政治・文化 |
| 80 | 寿 | 近代の村政や産業、教育 |
| 81 | 寿 | 民俗信仰・伝統行事と新しい行事 |
| 82 | 松原 | 住宅地造成とコミュニティづくりの歴史 |

| 地区 | 関連文化財群テーマ |
|-----|--------------------------------|
| 83 | 岡田 岡田の黎明期と岡田神社 |
| 84 | 岡田 岡田を治めた氏族・筑摩郡を治めた寺院 |
| 85 | 岡田 交通の要衝地 |
| 86 | 岡田 灌漑施設と水ごいの祈り |
| 87 | 岡田 民間信仰と伝統行事 |
| 88 | 岡田 岡田ゆかりの偉人たち |
| 89 | 岡田 平安・鎌倉時代の街道 |
| 90 | 岡田 民話と伝説 一池と大蛇、玄蕃石 |
| 91 | 岡田 承和大地震・田溝池決壊 |
| 92 | 岡田 芥子坊主を中心とした大古窯跡群 |
| 93 | 入山辺 山家郷のあけぼの |
| 94 | 入山辺 山家氏、小笠原氏と山城 |
| 95 | 入山辺 江戸時代の民間信仰 |
| 96 | 入山辺 信仰的伝統行事 |
| 97 | 入山辺 村の祭り |
| 98 | 入山辺 山辺の教育 |
| 99 | 入山辺 山辺谷の生業 |
| 100 | 入山辺 明治憲法下の遺産 |
| 101 | 里山辺 林城下の遺構 |
| 102 | 里山辺 美ヶ原(湯の原)温泉の成り立ち |
| 103 | 里山辺 大堰でつながる村々 |
| 104 | 里山辺 須々岐水神社の成立と関連文化財群 |
| 105 | 里山辺 山辺の戦争遺跡(太平洋戦争地下工場群) |
| 106 | 里山辺 旧「街道」の記憶 |
| 107 | 里山辺 小笠原氏の関連山城群 |
| 108 | 里山辺 <信濃(長野県)第一>と称された藍の生産拠点「山辺」 |
| 109 | 里山辺 里山辺・本郷地区に広がる大製瓦産業群 |
| 110 | 今井 今井の礎 ～故郷の記憶(今井の地名)～ |
| 111 | 今井 今井の繁栄 ～人と物の往来(道と道標)～ |
| 112 | 今井 今井の繁栄 ～水争いと古見大池原の開発～ |
| 113 | 今井 近代今井の象徴 |
| 114 | 今井 今井の礎 ～悠久の歴史の中で～ |
| 115 | 今井 今井の礎 ～平和への礎と未来へ～ |
| 116 | 今井 今井の繁栄 ～産業の変遷～ |
| 117 | 今井 民間信仰と伝統 ～受け継がれる心～ |
| 118 | 今井 民間信仰と伝統 ～続く信仰～ |
| 119 | 今井 民間信仰と伝統 ～祈りの心～ |
| 120 | 今井 民間信仰と伝統 ～信仰の跡～ |
| 121 | 内田 縄文集落のムラ |
| 122 | 内田 鉢伏信仰と牛伏寺 |
| 123 | 内田 ムラの祈り |

| 地区 | 関連文化財群テーマ |
|-----|------------------------------|
| 124 | 内田 横峰山麓の土砂災害と砂防事業の歴史 |
| 125 | 内田 内田の古屋敷・馬場家 |
| 126 | 内田 内田の教育と文化 |
| 127 | 本郷 古墳文化と遺跡・史跡 |
| 128 | 本郷 山城・砦と武士 |
| 129 | 本郷 本郷の峠と道 |
| 130 | 本郷 松本城主と本郷 |
| 131 | 本郷 戦争遺跡 |
| 132 | 本郷 文化とスポーツ |
| 133 | 本郷 記念物(景観) |
| 134 | 本郷 本郷の植物 |
| 135 | 本郷 温泉文化と養蚕 |
| 136 | 本郷 本郷地区の碑文 |
| 137 | 本郷 女鳥羽山信仰の碑石と女鳥羽の滝 |
| 138 | 本郷 山の恵みと信仰 |
| 139 | 四賀 磐座・山城と寺院(堂) |
| 140 | 四賀 街道と産業遺構 |
| 141 | 四賀 戦争と平和への祈り |
| 142 | 四賀 地層・化石と鉱山 |
| 143 | 四賀 保福寺峠 |
| 144 | 四賀 鎮守・講と農村共同体 |
| 145 | 安曇 北アルプスを越える街道 |
| 146 | 安曇 柚と山岳信仰 |
| 147 | 安曇 稲核の風穴と生業 |
| 148 | 安曇 近代の開発 |
| 149 | 安曇 自然の財産 |
| 150 | 安曇 ムラの信仰と絆 |
| 151 | 奈川 街道から生まれた歴史文化 |
| 152 | 奈川 森林資源等自然環境から生まれた歴史文化 |
| 153 | 奈川 信仰から生まれた歴史文化 |
| 154 | 梓川 梓川の恵みと西牧の経営 |
| 155 | 梓川 街道 |
| 156 | 梓川 信仰と行事 |
| 157 | 梓川 梓川の寺子屋と筆塚 |
| 158 | 波田 縄文中期の村 |
| 159 | 波田 古代の開発 大野牧と秦(波多)氏と若澤寺の成立 |
| 160 | 波田 旧野麦街道の往来について |
| 161 | 波田 大井堰により早くから開けた押出面(梓川氾濫原) |
| 162 | 波田 御林(波田官林)のため開発の遅れた右岸(上海渡面) |
| 163 | 波田 さまざまな祭り(信仰と祭り) |

松本市歴史文化基本構想 関連文化財群紹介ハンドブック

発行日：平成30年3月20日

発行者：松本市教育委員会

〒390-0874 長野県松本市大手3丁目8-13

印刷：精美堂印刷株式会社

